

# 十二支考

鶏に関する伝説

南方熊楠

青空文庫



晋の宗懐そうりんの『荊楚歲時記けいそさいじき』註に魏の董勛とうくんの『問礼俗』に曰く、正月一日を鶏と為しな、二日を狗いぬと為し、三日を羊、四日を猪い、五日を牛、六日を馬、七日を人と為す。正旦鶏を門に画えがき、七日人を帳ちやうに帖ちやうす、今一日鶏を殺さず、二日狗を殺さず、三日は羊、四日は猪、五日は牛、六日は馬を殺さず、七日刑を行わず（人を殺さず）またこの義なり云々。旧ふるく正旦より七日に至る間鶏を食うを忌む。故に歳首ただ新菜を食い、二日人鶏に福施すとありて、正月二日の御祝儀として特に人と鶏に御馳走をしたのだ。『淵鑑

類函』一七に『宋書』に曰く、歲朔さいさく、常に葦莢いきよう、桃梗とうこうを設け、鶏を宮および百司の門に磔たくし以て悪氣を禳はらう。『襄元新語』に曰く、正朝に、梟官、羊を殺してその頭を門に懸け、また鶏を磔してこれに副そう。俗説以て厲氣れいきを厭ようすと為なす。元以て河南の伏君に問う、伏君曰く、これ土氣じようしよく上じようしよく升しやうし、草木萌動ぼうどうす。羊、百草を齧かみ、鶏五穀ごこくを啄つばむ。故にこれを殺して以て生氣を助くと。元旦から草木が生え出すを羊と鶏が食い荒すから、これを殺して植物の発芽を助くというのだ。『琅邪代醉編』二に拠れば、董勛の元日を鶏、二日を猪などとなす説は、漢の東方朔とうほうさくの『占年書』に基づいたので、その日晴ればその物育ち、陰くもれば災わざわいありとした。例せば元日晴れば鶏がよく育ち、二日曇れば豚が育たぬ

などだ。さて正月八日は穀の日で、この日の晴曇でその年の豊凶が知れるという説もあつたそうだ。宋の龐元英ほうげんえいの『談藪』には道家言う、鶏犬を先にして人を後にするは、賤者は生じやすく貴者は育しがたければなりとある。漢の応劭の『風俗通』八を見るとへ鄧平とうへい説、臘は刑を迎え徳を送る所以ゆえんなり、大寒至れば、常に陰勝つを恐る、故に戌日じゅつを以て臘す、戌は温気なり、その氣の日を用いて鶏を殺し以て刑徳を謝す、雄は門に著け雌は戸に著け、以て陰陽を和し、寒を調え水に配し、風雨を節するなり、青史子の書説、鶏は東方の牲なり、歳終り更始し、東作を弁秩す、万物戸に触れて出づ、故に鶏を以て祀祭するなりと載せ、へまた俗説、鶏鳴まさに旦せんとす、人の起居を為す、門もまた昏に閉じ

晨に開き、難を扞ふせぎ固を守る、礼は功に報るを貴ぶ、故に門戸に鶏を用うるなり。これは鶏は朝早く鳴いて人を起し門戸を守る大功あれば、その報酬として鶏を殺し門戸に懸くるといふので、鶏に取つては誠に迷惑な俗説じゃ。蔡さい邕いようの『独断』に、臘は歳終の大祭、吏民を縦はなつて宴飲せしむ。正月歳首また臘の儀のごととある。件くだんの『風俗通』に出た諸説を攷かんげると、どうも最初十二月の臘の祭りの節、鶏を殺して門戸に懸けたのが後に元日の式となつた事、ちようど欧州諸国で新年の旧式が多くクリスマスへ繰り上げられたごとし。しかるにへ古はすなわち鶏を磔す、今はすなわち殺さず、また、正月一日、鶏鳴きて起き、まず庭前において爆竹し、以て山さん悪鬼を辟さく云々。画鶏を戸上に帖し、葦

索をその上に懸け、桃符とうふをその傍に挿む、百鬼これを畏るゝと  
 『荊楚歳時記』に載せ、註に董勛いわく、今正臘あしたの旦た、門前、烟  
 火桃神を作しな、松柏を絞索し、鶏を殺して門戸に著け、疫を追う  
 は礼なり。『括地図』にいわく、桃都山に大桃樹あり、盤屈三千  
 里、上に金鷄あり、日照らせばすなわち鳴く。下に二神あり、一  
 を鬱うつ、一を罌るいと名づく、並びに葦あしの索さくを執つて不祥の鬼きを伺い、  
 得ればすなわちこれを殺すと。『風俗通』八に黄帝書を引いてい  
 わく、上古の時、茶とと鬱とてふ昆弟こんてい二人、能く鬼を執らう。度朔  
 山上の章桃樹下に百鬼を簡閱し、道理なく妄みだりに人の禍害を為すな  
 鬼を、茶と鬱と、葦繩で縛りて虎に食わす。故に具官常に臘除じよせ  
 夕きを以て桃人を飾り、葦索を垂たれ、虎を門に画くとあり。桃人

は『戦国策』に見える桃梗で、へ梗は更なり、歳終更始す、介社を受くるなりとあれば、年末ごとに改めて新しいのを門に懸けた桃木製の人形らしく、後には単に人形を画いて桃符とうふといつたらしい。和漢その他に桃を鬼が怖るるてふ俗信については『日本及日本人』七七七号九一頁に述べ置いた。

そこに書き洩らしたが加藤雀庵の『囀さえずり草』の虫の夢の巻に、千住の飛鳥あすかの社頭で毎年四月八日に疫癘えきれいを禳はらう符はらというを出すに、桃の木で作れり、支那に倣ならうたのたろうとある。『本草図譜』五九に田村氏（元雄か）説とて、日本で桃で戸守り符を作る事なき由を言えるも例外はあつたのだ。さて桃木製の人形が人を画いた桃符に代ひとつたと齊ひとしく、鶏を磔はらに懸けたのが戸上に画鶏を貼り



付けるに変わったのじゃ。何のために鶏を殺したかは、後に論ずるとして、鶏に縁厚い西歳の書き始めに昔の支那人は元日に鶏をはりつけ磔にしたという事を述べ置く。

それから『荊楚歳時記』から引いた元旦の式を述べた上文、

へ以て山 悪鬼を辟くゝの次に、へ長幼ことごとく衣冠を正し、

次を以て拝賀し、しょうはく 椒 柏酒を進め、桃湯を飲み屠蘇とそを進む云々、

各一鶏子を進むゝとあつて、註に『周処風土記』に曰く、正旦まさに生ながら鶏子一枚を吞むべし、これを鍊形というとある。鶏卵を吞んで新年の身体を固めたのだ。それから『煉化篇』を案ずるにいわく、正旦鶏子赤豆七枚を吞み瘟氣おんきを辟くとあるが、鶏卵七つも吞んでは礼廻りの途上で立ちすくみになり、二日のひめ始

めが極めて待ち遠だろうから直ちに改造と出掛けたものか、『肘ち後方ゆうごほう』には元旦および七日に、麻子、小豆、各十四枚を吞めば疾疫を消すとあつて、卵は抜きとされおり、梁の武帝、嚴に動物食を制してより、元旦に鶏卵を食うは全廢となつたとある。

鶏卵をめでたい物とする事西洋にも多い。グベルナチス伯の

『動物譚原』二卷二九一頁にいわく、鶏卵天にありては太陽を表わす。白い牝鶏は金の雛ひなを産むとて特に尊ばる。イタリアのモンフェラトではキリスト昇天日に新しい巢で生まれた卵は胃と頭と耳の痛みを治し、麦畑に持ち往けば麦奴の侵害を予防し、葡萄園ぶどうに持ち往けばその葡萄が霰あられに損あぜずと信ぜらる。復活祭の節、キリスト教徒が鶏卵を食くひ相贈遺そういするに付いて、諸他の習俗、歌唄、

諺話、欧州に多いが、要するに天の卵より雛の生まれ出るにキリストの復活を比べ、兼ねて春日の優に到ると作物の豊饒を祝うたのだ。古ギリシアやインドの創世紀は金の卵に始まり、世界は金の卵より動き始め、動くは善の原則たり、光明あり労働し利世する日は金の卵に生ず、故に一日の始めに卵を食うは吉相で、ラテン語の諺にアブ・オヴオ・アド・マルム（善より悪へ）というはもと卵より林檎りんごへの義だ。古ラテン人は食事の初めに煮固めた卵、さてしまいに林檎を食ったので、今もイタリアにその通り行う家族多し、また古ギリシアの諺にエクス・オウ・エキセルテン、卵より生まるといふは絶世の美人を指したので、その由来は、大神ゼウスがスパルタ王ツンダレオスの妻レーダに懸想し、天鷲に化

けてこれを孕ませ二卵を産んだ。その一つから艶色無類でトロイ戦争の基因たるヘレネー女、今一つからカストルとポルクスでふ双生児が生まれたからだとあるが、天鷲形の神に孕まされて生んだ卵は天鷲卵で鶏卵でなからう。何に致せグベルナチス伯の言のごとく、世界は金の卵から動き始める理窟だから、金の卵の噺から書き始めようとしても、幾久しく聞き馴れた月並の御伽噺おとぎばなしにありふれた事では面白からず、因って絶体絶命、金の卵の代りにキンダム譚ぼなしからやり始める。

けだし金の卵とキンダム、国音相近きを以てなるのみならず、梵語でもアンダなる一語は卵をも辜丸をも意味するからだ。支那でも明の劉若愚の『四朝宮史酌中志』一九に内臣が好んで不腆ふてんの

物を食うを序して、へまた羊白腰とはすなわち外腎卵なり、白牡馬の卵に至りてもつとも珍奇と為す、竜卵という。『笑林広記』に孕んだ子の男女いずれと卜者に問うに、へ卜し訖りて手を拱いて曰く、恭喜すこれ個の卵を夾むもの、その人甚だ喜び、いわく男子たること疑いなし、産するに及びてかえつてこれ一女なり、因つて往きてこれを咎む、卜者曰く、これ男に卵あり、これ女これを夾む、卵を夾む物あるは女子にあらずして何ぞ。辜丸を卵と呼んだのだ。グベルナチス伯曰く、古ローマ人の迷信に牝鶏が卵を伏せ居る最中に雷鳴すれば、その卵敗れて孵らずと、プリニウス説にこれを防ぐには卵の下草の下に鉄釘一本、または犁のサキで済い揚げた土を置けば敗れずと、コルメラは月桂の小枝とニ

ンニクの根と鉄釘を置けと言った。これ電を鉄製の武器とし、また落雷の際、硫黄の臭あるより、似た物は似た物で防ぐてふ考えから、釘と硫黄に似た臭ある枝や根で防ぎ得としたのだ。今もシシリイでは牝鶏が卵を伏せ居る巢の底へ釘一本置きて、未生の雛に害あるすべての騒々しい音を、釘が呼び集め吸収すると信ず。

さて珍な事はインドの『ヴェーダ委陀』に雷神たいしやく帝釈ていしゃくを祈る偈げあり

「帝釈よ、我輩を害するなかれ、我輩を壊やぶるなかれ、我輩の愛好する歓樂を取り去るなかれ、ああ大神よ、ああ強き神よ、我輩のアンダ（辜丸または卵）を潰すなかれ、我輩腹中の果を破るなかれ」と。これは帝釈は自分去勢されたが（帝釈雄鶏に化けて瞿曇くどん仙人の不在に乗じ、その妻アハリアに通じ、仙人誑のろうてその勢を

去つた譚は前（別項猴の話）に出した）、雷、震して人を去勢し  
 能うとインド人は信じたのだと。わが邦でも落雷などで極めて驚  
 くと辜丸釣り上がると言うが、インドでは釣り上がるどころか天  
 上して失せおわるとしたのだ。件の偈くだんは牝鶏が卵を雷に破らるる  
 をおそ懼れて唱うるようにも、男子が雷に辜丸を天まで釣り上げらる  
 るを憂いてのようにも聞える。実に人間に取つてこれほど大事の  
 物なく、一七〇七年にオランダで出版したシャル・アンシヨンの  
 『閹人論』えんじんろんはジュール・ゲイの大著『恋愛婦女婚姻書籍目録』  
 卷三に出るが、余が大英博物館で読んだアンシヨンの『閹人頭正  
 論』は一七七八年ロンドン刊行で、よほど稀覯きこうの物と見え、右の  
 目録にも見えぬ。因つて全部二百六十四頁を手ずから写し只今眼

前にある。これはオランダ板の英訳かまたまるで別書か目下英仏の博識連へ問い合せ中だ。十八世紀の始め頃欧州で虚栄に満ちた若い婦女が力なき老衰人に嫁する事<sup>しき</sup>荐りなりしを慨し、閩人の種類をことごとく挙げて、陽精<sup>こかつ</sup>涸渴した男に嫁するは閩人の妻たるに等しく何の楽しみもなければ、それより生ずる道德の頹敗寒心すべきもの多しとて、広く娶<sup>よめ</sup>入り盛りの女や、その両親に論<sup>さと</sup>した親切至れる訓誡の書だ。著者アンシヨンは宗教上の意地より生国フランスからドイツへ脱走し、プロシヤで重用され教育上の功大いに、また碩儒ライブニツと協力してベルリン学士会院を創立した偉人で、その玄孫ヨハン・アンシヨンも史家兼政治家として人物だった。その『閩人顕正論』の四二頁<sup>いか</sup>已下にいわく、十一世紀



にギリシア人、イタリアのベネヴェント公と戦い、甚くこれを苦しめた後、スポレト侯チツバルドこれを援けてギリシア軍を破り、数人を捕えこれを宮してギリシアの將軍に送り、ギリシア帝は特に閹人を愛するからこれだけ閹人を拵えて進ずる、なおまた勝軍して一層多く拵えて進ぜようと言いやつた。その後また多くギリシア人を虜して一日ことごとくこれを宮せんとす。爾時その捕虜の一妻大忙ぎで走り込み、侯と話さんと乞うた。侯その女に何故さように泣き叫ぶかと問うと、女対えて「わが君よ、君ほどの勇將がギリシアの男子が君に抵抗し能わざるに乘じ、か弱き女と戦うて娯しまんとするを妾は怪しむ」といった。侯昔女人国が他国の男子と戦うた以来かつて男子が女子と戦うたと聞かぬとい

うと、ギリシア婦人いわく「わが君よ、妾らの夫にある物あつて妾輩に健康と快樂と子女を与う。その大事の物を夫の身より奪い去るとは、世にこれほど女人と戦い苦しむる悪業またあるべきや、これ夫を宮するならず実に妾輩を去勢するに当る。過ぐる数日間わが蔵品家畜を君の軍勢に多く掠められたが苦情を述べず」と言いさして侯の面を見詰め、「心安い多くの婦人から奪われた大事の物の紛失は癒すに術なきを見てやむをえず、勝者の愍憐を乞いに来ました」と、この質直な陳述を聴いていかでか感ぜざらん、大いに同情してその女に夫ばかりか掠奪物一切を還しやったとあれば、他の捕虜どもは皆去勢されたので「高繩の花屋へ来るも来るも後家」、ごけ「痛むべし四十余人の後家が出来」とある。亭主に

死に別れたは諦めも付こうが、これはまた生きながら死んだも同然の亭主の顔を見るたびに想い出す、事実上の後家が大勢出来たのだ。さて彼女が夫を伴れ去らんとするに臨み、侯呼び還して、今後また汝の夫が干戈を執つてわが軍に向わばどう処分すべきやと尋ねると、女大いにせき込んで「眼も鼻も手足もわが夫の物なれば罪相応に取り去られよ、夫の身にありながら妾の専有たる大事の物は必ず残してくだされ」と、少しの笑顔も悪からず、あぶないぞえと手を採つて導き帰るぞ哀れなるとある。

昔趙人 藺相如りんしやうじよが手に鶏を縛るの力なくして、秦廷に強勢の昭王をやりこめ天下に二つとない和氏かし連城の玉を全うして還つたは、大枚の国費で若い女や料理人まで伴れ行き猫の欠あくびほどの発言

も為し得ななんだ人物とし霄しょうじょう 壤じょうだが、このギリシア婦人が揚威せる敵軍に直入して二つしかないその夫の大事の玉を助命して帰つたは、勇氣貞操兼ね備わり、真に見揚げたとまで言い掛けたが、女を見揚ぐるはどごぞに野心あるからと仏が戒めたから中止として、谷本博士が言われた通り、婦女に喉を切るたしな嗜みなどを仕込むよりは、辜丸の命乞いは別として、勇胆弁才能く敵將を説伏するほどの心掛けを持たせたい事である。

俗に陰囊の垂れたるは落ち着いたしるし徴で、昔武士が戦場で自分の剛臆を試むるに陰囊を探つて垂れ居るか縮み上つたかを検したと  
いうが、パッチ股ももひき引ひジャあるまいし甲冑きを著たやすて容易く探り得た  
だろうか。したがって陰囊の垂れた人は気が長いという。これは

本當で、かく申す熊楠のは何時いつも糸瓜へちまのごとし。それ故か何事を  
も糸瓜とも思わず、ブラブラと日を送るから昨年こぞの「猴さるに関する  
民俗と伝説」も麁稿そごうは完成しながら容易に清書せず忘れてしまい、  
歳迫つてようやく気が付き清書に掛かったが間に合わず、ついに  
民俗までで打ち切つて伝説の部は出し得なんだに由つて今この篇  
は先例を逆さまに伝説から書き始めた。こんな気の長い人が西洋  
にもあつたものか、チャムバースの『ブック・オヴ・デイス』に  
珍譚あり。昔話に物言わずに生まれ付いた人が騎馬して橋を過ぐ  
る内、顧みてその家来に汝は鶏卵を好くかと問うとハイ好きます  
と答えた。何事もなしに一年経つて一日同じ橋を騎馬で過ぐる内、  
同じ家来に去年の問いを続けるつもりでどんなのをと問うと、家

来も抜からず焼いたのであります。これよりも豪いのはグラスゴウ附近カムプシーちゆう所の牧師アーチブルド・デンニストンで、一六五五年その職を免ぜられ、王政恢復（一六六〇年）の後復職した。免職前に講演第一条を終った続きの第二条を復職後述ぶる発端に、時節は変つたが聖教はいつも変らぬと口を切つたそうだとところがこの牧師も 瞳 どうじやく 若と尻餅を搗かにならぬ珍報が一八六二年の諸新聞紙に出た。紀元七十九年ヴェスヴィウス山大噴火のみぎり、ポンペイ市全滅に際しその大戯場で演劇を催しいた実跡あるに乘じ、今度ランギニてふ山師がポンペイの廃趾に戯場を建て、初演の広告に当戯場は千八百年目にいよいよまた「行儀の娘」の外題で開演するに付き、前の座主マルクス・キンツス・マ

ルチウスの経営中に劣らず出精致しますれば、貴顕紳士は相替らず御贖願御入来を願うと張り出した。熊楠いう、東洋にはずつと豪いのがあつて、玄奘三蔵の『大唐西域記』卷十二烏※国うせつこくの条に、その都の西二百余里の大山頂に卒都婆あり、土俗曰く、数百年前この山の崖崩れた中に比丘瞑目して坐し、軀量偉大、形容枯槁し、鬚髮下垂して肩に被り面に蒙る。王も都人も見物に出懸け香花を供う、この巨人は誰だろうと王が言うのと、一僧これは袈裟を掛け居るから滅心定めつしんじょうに入った阿羅漢だろう、この定に入るに期限あり、犍稚かんち（わが邦の寺で敲き鳴らす雲板、チヨウハンの類）の音を聞けば起るとも、日光に触れば起るともいふ、さもない間は動かず、定の力で身体壊れず、かく久しく断食した

人が定を出たら酥油そゆを注いで全身うるおを潤し、さて犍稚を鳴らして寤さますがよいと答えた。その通りして音を立てる事わずかにして羅漢眼を開き、久しく見廻して汝ら何人で形容卑劣なくせに尊い袈裟を被るぞと問うた。かの僧我は比丘だと答うると、しからば我師迦葉波如来かしようはは今何処いずこにありやと問う。かの如来は大涅槃だいねはんに入りて既に久しと聞いて目を閉じ残念な顔付しました釈迦如来は世に出たかと問うから、昔生まれて世を導きすでに寂滅じやくめつされたと答う。久しく頭を俯ふした後虚空こくうに昇り、自分で火を出し身を焚やいて遺骸地に墮ちたのを、王が収めてこの塔を立てたと見ゆ。

誰も知る通り婆羅門教に今の時代を悪劫あくごうとするに反し、仏教には賢劫けんごうと称す。この賢劫に四仏既に出た。人壽五万歳の時拘く



留孫るそんぶつ仏、人壽四万歳の時俱那含牟尼くなんこんむにぶつ仏、人壽二万歳の時迦葉波  
 仏、人壽百歳の時釈迦牟尼しやくか牟尼仏が出て今の仏法を説いた。それより  
 段々減じて人壽十歳、身の長たけ一尺、女人生まれて五月にして嫁す。  
 人氣至つて悪く悪行する者は人に敬せられ、草木瓦石を執るも皆  
 刀劍とあり、横死無数なり。その時山に蔵かくるる者ただ一万人残る。  
 他の人種相殺し尽した後のち出で来り相見て慈心を起し共に善法を行  
 う。その功德くどくで百年ごとに一年ずつ命が増す、人壽八万四千歳に  
 上りそれより八万歳を減ずる時賢劫の第五みろくぶつ仏弥勒みろくぶつ仏が出る。減  
 じたというものの、人の命が八万年でそれより一年も若くて死ぬ  
 者なく、女人は五百歳で方まさに嫁す。日に妙樂を受け、禪ぜんじょう定じょうに  
 遊ぶ事三禪の天人のごとく常に慈心ありて恭敬和順し一切殺生せ

ず。ただ飲食便利衰老の煩を免るる能わず。香美の稻ありて一度種ううれば七度収獲され、百味具足し口に入ればたちまち消化す。

大小便の時地裂け赤蓮花を生じて穢お気を蔽おうとあるから、そんな

結構な時代の人もやはり臭い糞は垂れるのだ。人民老ゆれば自然に樹下に往き、念仏して静かに往生し、大梵天や諸仏の前に生ま

る。その時の聖王に子千人と四大宝蔵あつて中に珍宝満つ。衆人

これを見て貪とんじやく著せず、釈迦仏の時昔の衆生この宝のために相あい

偷とうごう劫して罪を造つたと各呆あきれる。その時弥勒仏生まれて成じようど

道うし、件くだんの聖王その悴せがれ九百九十九人と弟子となつて出家し一子

のみ出家せずに王位を嗣つぐ。弥勒世尊、翹しとうまつ頭末城じようがい外の金こんご

剛うし莊しやうごん嚴ごん道場どうじやう 竜華菩提樹下りゆうげぼだいじゆげで成道する。この樹は枝が宝

竜のごとく百の宝華ほうげを吐く故この名あり。初めに金剛座上で説法し九十六億人阿羅漢を得、二会と三会に城外の華林園で説法し、九十四億と九十二億の人が阿羅漢となる。これを竜華の三会といつて馬琴の『八犬伝』の文句にも出れば、弥陀の念仏流行して西方浄土往きの切符大投げ売りとなるまでは、キリスト教の多くの聖人大士が極楽へ直通りせず最終裁判の日を待ち合すごとく、弘法大師その他の名僧信徒、殊ことに畏れ多いおそが至尊で落飾された方々もこの弥勒の出世をあるいは入定したり、あるいは天上靈域で待ち合され居るはずとさる高僧から承つた。とにかく昔の仏徒が弥勒の出世を踰まつ事、古いキリスト教徒がミルレニウムを踰まつたごとく、したがって、中国や朝鮮で弥勒と僭せん号ごうして乱を作なした者

もありと記憶し、本邦でも弥勒十年辰の年など万歳まんざいが唱え祝い、余幼時「大和国がら女のよば呼びおとこ弥勒の世じやわいな」てふ俚謡を聞いた。およそ仏教の諸経に、弥勒の世界と鬱うったんの单越のつしゅう洲を記せる、その人間全く無差別で平等で、これが西洋で説かれていたら遠くの昔に弥勒社会主義とかやうのものが大いに起つたはずだが、東洋には上述の僅々小人がこれを冒して、小暴動を起したくらいに止まり、わが邦では古く帝皇以下ことごとくその経文を篤信して静かにその出世を俟たれたので、どんな結構な文も読む者の心得一つで危険思想も生ずれば、どんな異常な考えを述べた者も穏やかにこれを味わえば人心を和らげ文化を進めるに大益ありと判る。ただし『仏説觀弥勒菩薩げしよきよう下生げしよきよう經』に、この閻えんぶだ浮

提洲いしゅう、弥勒の世となつて、危険な物や穢きたない物ことごとく消え失  
 せ、人心均平、言辞一類となり、地は自然に香米を生じ、衣食一  
 切の患苦なしとあるに、無数の宝を蔵おさめた四大倉庫自然に現出す  
 ると、守蔵人、王もうに白す。ただ願わくば大王この宝蔵の物を以て  
 ことごとく貧窮に施せと、爾そのとき時大王この宝を得え已おわつてまた省録  
 せず、ついに財物の想なしと言えるは辻褄が合わず、どんな暮し  
 やすい世になつても、否暮しやすければやすいほど貧乏人は絶え  
 ぬ物と見える。さて、弥勒世尊無量の人と耆闍崛山頂ぎしゃくつせんに登り、  
 手ずから山峯つんざせを壁く。その時梵王天の香油を以て大迦葉尊者の身  
 に灌そそぎ、大犍椎だいかんちを鳴らし大法螺おおぼらを吹く音を聞いて、大迦葉すな  
 わち滅尽定めつじんじょうより覚さめ、衣服を齊整して長ちようき跪合掌し、釈迦如

来涅槃に臨んで大迦葉に付嘱した法衣を持って弥勒仏に授け奉る。  
 釈迦の身長は一丈八尺とか、その法衣が弥勒仏の両指をわずかに  
 掩おおうはずと土宜法竜僧正から承った。さればこの時諸大衆今日こ  
 の山頂に人頭の小虫 醜しゅうろう 陋なるが僧服を著て世尊を礼拝するは  
 珍なものだと嘲ると、弥勒世尊一同に向い、孔雀好色あれど鷹、  
 鶻こつよう 鶻こつように食われ、白象無量の力あるを、獅子獸小さしといえども  
 撮り食らう事塵土じんどのごとし、大竜身無量にして金翅鳥こんじちように搏うたる、  
 人身長大にして、肥白端正に好しといえども、七宝の瓶かめに糞を盛  
 り、汚穢おわい堪うべからず、この人短小といえども、智慧鍊金のごと  
 く、煩惱の習久しく尽き、生死苦余すなし、護法の故にここに住  
 み、常に頭陀ずだじ事を行う。天人中最も勝すぐれ、苦行与等なし、牟尼両

足尊、遣わし來つて我所に至る。汝らまさに一心に、合掌うやうやして恭  
 しく敬礼すべしと偈げを説き、釈迦牟尼世尊五濁の惡世に衆生を教き  
ようけ化した時、千二百五十弟子の中で頭陀第一、身体金色で、金色  
 の美婦を捨て、出家学道昼夜精進して貧苦下賤の衆生を慈愍じびんし、  
 恒つねにこれを福度し、法のために世に住する摩訶迦葉とはこの人こ  
 れなりと呵かするので一同鞞丸縮み上つて恐れ入る。一丈八尺の法  
 衣が二指を掩い兼ねるほどの巨人の鞞丸だから、一個の直径一間けん  
 は確かにある。そこで大迦葉尊者前うせつこく述しゅつじょう烏※国うせつこくの 出 定 阿羅漢  
 同様の芸当を演じ、自ら火化する骨を弥勒が拾うて塔婆を立つる  
 という未来記だが、五十六億七千万年後のこと故信ずるにも足ら  
 ねば疑うも気が利かぬ。ただ熊楠がここに一言するは、壯歳諸国

を歴遊した頃は、逢う南中米のスペイン人ごとに余を輕視する事甚だしく、チノ・エス・エル・シウダッド・デル・ハボン（支那は日本の都）といつて、日本とは支那の領地の片田舎と心得た者のみだった。かく肩身の狭い日本に生まれながら、その頃の若者はそれぞれ一癖も二癖もあり、吾輩自身も自分がかつてこれほどの事がよく出来たと驚くほどの働きをした。しかるに日本の肩味が広くなればなるほど、これが何で五大国の一かと重ね重ね怪しまるるほど日本人の実働が下つたように思う。孔雀好色あれど鷹に食われ、獅子小といえども大象を撮り食う事塵土のごとしという。弥勒、如来の詞はことば分け切つた事ながら各の身に当て省みるべきじや。『西域記』九には大迦葉が釈迦の法衣を守つて入定し居



る地を鷄けい足山そくとす。三つの峯聳そびえて鷄の足に似たから名づけたらしい（ビール英訳、二卷一四二頁註）、これは耆闍崛山と別だ。「迦葉尊者は鷄足に袈裟を守って閉じ籠る」という和讚わさんあれば、本邦では普通鷄足山に入定すとしたのだ。支那にも『史記』六に「始皇隴ろうせい西北地を巡り、鷄頭山に出で、回中を過ぐ」とある。鷄頭の形した山と見える。

（大正十年一月、『太陽』二七ノ一）

## 2

この稿を続けるに臨み啓もうし置くは、鷄の伝説は余りに多いから

その一部分を「桑名徳蔵と紀州串本港の橋杭岩」と題して出し置いた。故川田甕江先生は、白石が鳩巢に宛てた書翰しよかんと『折焚柴おりたくしばの記』に浪人越前某の伝を同事異文で記したのを馬遷班固の文以上に讚ほめたが、『太陽』へ出すこの文と『現代』へ寄せたかの文を併あわせ読んだら、諸君は必ずよくもまあたつた一つのこの鳥について、かくまで夥しい材料を、同じ嘶はなしを重出せずに齊整して同時二篇に書き分けたものだ、南方さんは恐らく人間であるまいと驚嘆さるるに相違ない。さて前に釈迦の身長を記しながら「大仏の〇〇の太さは書き落し」で弥勒の身長を言い忘れたが、弥勒世界の人の身長は十六丈で弥勒仏の身長は三十二丈だ（『仏祖統記』三十）、また昔弥勒と僭せんごう号した乱賊あつたと記

憶のまま書き置いたが、確かに見出した例を挙げると高麗王辛※  
 八年五月妖民伊金を誅す、伊金は固城の民で自ら弥勒仏と称し、  
 衆を惑わして我能く釈迦仏を呼び寄せる。およそ神祇を祀る者、  
 馬牛肉を食う者、人に財を分たぬ者は必ず死ぬ、わが言を信ぜず  
 ば三月に至つて日月光なし、またわれは草に青い花を咲かせ、木  
 に穀を実らせ、一度種えて二度刈り取らしめ能う。また山川の神  
 をことごとく日本に送り倭賊を擒にすべしなど宣言したので、愚  
 民ども 城 隍 祠 廟の神を撤て去り、伊金を仏ごとく敬い福利  
 を祈る、無頼の徒その弟子と称し相誑かし、至る所の州郡守令出  
 迎えて上舎に館する者あり、清州の牧使権和、その渠首五人を  
 捕斬しようやく鎮まつたという（『東国通鑑』五一）、当時高麗

人日本を畏るるに乘じ、彌勒仏と詐称した偽救世主が出た。その事極めて米国を怖るる昨今おおもときよう大本教が頭を上げたと似て居るぞよ。怖れて騒ぐばかりでは何にもならぬぞよ。支那にも北魏孝莊帝の時冀州ききの沙門法慶、新仏出世と称し乱を作したな（『仏祖統記』三八）。

さて前回やり掛けた鶏足山の話が続ける。大迦葉がにゆうじよう入定して彌勒の下げしやう生を待つ所を、耆闍崛山ぎしやくつせんとするは『涅槃經後分』に基づき、鶏足山とするは『付法藏經』に拠る（『仏祖統記』五）。『觀彌勒菩薩下生經』に彌勒は鶏頭山に生まるべしとあれば、かたがたこの仏は鶏に縁厚いらしい。支那には雲南に鶏足山あり、一頂にして三足故名づく、山頂ほらに洞あり。迦葉これに籠つて仏衣

を守り弥勒を俟つという（『大清一統志』三一九）。本邦でも中尊寺の鶏足洞、遠州の鶏足山正法寺など、柳田氏の『石しゃくじん神問答』に古く鶏を神とした俗より出た名のごとく書いたようだが、全く弥勒と迦葉の仏説に因った号と察する。

かく東洋では平等無差別の弥勒世界を心長く待つ迦葉と鶏足を縁厚しとし、したがって改造や普選の運動家はこれを徽きしょう章しやうに旗標しなに用いてしかるべき鶏の足も、所変われば品しな変わるで、西洋では至つて不祥な悪魔の表識とされ居るので面黒い。それは専ら中世盛んに信ぜられた妖鬼アスモデウスの話に基づき、その話はジュスレリーの『文界奇観』等にしばしば繰り返され、殊にルサーージュの傑作『ジアブル・ボアトール』に依つて名高い。姪鬼の迷信は

中古まで欧州で深く人心に浸<sup>し</sup>み込み、碩学高僧真面目にこれを禦<sup>ふ</sup>せ  
 ぐ法を論ぜしもの少なからず。実体なき鬼が男女に化けて人と交  
 わり、甚だしきは子を孕ませまた子を孕むというので、ローマの  
 開祖ロムルスとレムス、ローマの第六王セルヴィウス・ツリウス、  
 哲学者プラトンやアレキサンダー王、ギリシアの勇将アリストメ  
 ネス、ローマの名将スキピオ・アフリカヌス、英国の術士メルリ  
 ン、耶<sup>ヤ</sup>蘇新教の創立者ルーテルなどいずれも姪鬼を父として生ま  
 れたとか（一八七九年パリ板シニストラリの『姪鬼論』五五頁）、  
 わが邦には古く金剛山の聖人染<sup>そのどの</sup>殿后を恋い餓死して黒鬼となり、  
 衆人の面前も憚<sup>はばか</sup>らず后を<sup>じょうらん</sup> 乱<sup>らん</sup>した譚あり（『今昔物語』二十  
 の七）、近くは一九の小説『安本丹<sup>あんぼんたん</sup>』に、安本屋丹吉の幽霊が

昔なしみ馴染の娼妓、人の妻となり、夫に添ねい臥た所へ毎夜通い子を生まだいもんちやくまし大捫だいもんちやく扱やくを起す事あり。欧州にも『ベルナルズス尊者伝』にナントの一婦その夫と臥た処を毎夜鬼に犯さるるに、夫熟睡して知らず、後事ごしあ露あらわれ夫おそ懼れて妻を離縁したと載せ、スプレングルはある人鬼がその妻を犯すを睹み、刀を揮ふるうて斬れども更に斬れなんだと記す。ボダン説に鬼交は人交と異なるなし、ただ鬼の精冷たきを異とすと。支那でも『西遊記』に烏鷄国王を井おとしに陥しいれ封じた道士がその王に化けて国を治む、王の太子母后に尋ねて父王の身三年来氷のごとく冷たしと聞き、その変化へんげの物たるを知り、唐僧師弟の助力で獅子の本身を現わさしめ、父王を再活復位せしめたとある。仏説にも男女もしくは黄門（非男非女の中性人）が

売姪で財を得、不浄身もて妄みだりに施さば死後欲色餓鬼に生まれ、随意に美男美女に化けて人と交會すという（『正法念処經』一七）、一六三一年ローマ板ボルリの『交趾支那伝道記』二一四頁に、その頃交趾に姪鬼多く、貴族の婦女これと通ずるを名誉とし、甚だしきはその種を宿して卵を生む者あり、しかるに貧民は姪鬼を厭うの余り天主教に帰依してこれを防いだと出いづ。宋朝以来南支那に盛んな五通神は、家畜の精が丈夫に化けて暴にわかに人家に押し入り、美婦を強辱するのだ（『聊齋志異』四）。けだし姪鬼に二源あり、一は男女の精神異態より、夢うつつの間に鬼と交わると感ずる者。今一つは若干の古ローマ帝が獸皮を被つて婦女を姦したごとく、特種の性癖ある者があるいは秘社を結び、あるいは



単独で巧みに鬼の真似まねして實際婦女を犯したのだ。そのほかに人と通じながら世間を憚おそって鬼に犯されたと詐称したのもすこぶる多かろう。四十年ほど已前、紀州湯浅町の良家の若い妻が盆踊りを見に往きて海岸に徇しやう 徇しやう 徉よう するとところを、壮漢数輩ちゆうかんすうばい拉らして沖の小島へ伴れ行き輪姦せしを本人も一族も慙はじて、大亀の背に乗せて島へ運ばれたと浦島子伝の翻案を言い触はらしていた。古アツカジア人既に姪鬼を攘はらう呪法を備え（一八七四年パリ板ルノルマン著『カルジアおよびアツカジア魔法篇』三六頁）、一八一七年板マーチンの『トンガ島人記』二卷一一九頁には、ホトア・ポウてふ邪神好んで悪戯して人を苦しむ。ハモア島民はこの神しばしば睡中婦女を犯し、ために孕まざる者多し。けだし不貞を掩うに

よき口実だと記す。以て姪鬼の迷信がいに古く、またいかな小島までも行われたるを知るに足る。南インドでは難産や経行中死んだ女はチュデル鬼となり、前は嬋娟せんけんたる美女と見ゆれど、後は凄愴せいそうたる骸骨で両肩なし、たまたま人に逢わば乞いてその家に伴れ行き、夜の友となりて六月内に彼を衰死せしむと信ず（エントホウエンの『グジャラツト民俗記』一〇七および一五二頁）、かく諸方に多い姪鬼の中でアスモデウス最も著あわる。あるいはいう最初の女エヴァを誘惑した蛇、すなわちこの鬼だと。ウイエルス説に、この鬼、地獄で強勢の王たり。牛と人と山羊に類せる頭三つあり。蛇の尾、鷲の足を具え、焰ほのおの息を吐き竜に乗りて左右手に旗と矛ほこを持つと（コラン・ド・ブランシー『妖怪辞彙』五板

四六頁)、アラビアの古伝にいう、ソロモン王、アスモデウスの印環を奪いこれを囚とらう。一日ソロモン秘事をアに問うに、わが鎖を寛ゆるくし印環を還さば答うべしというた。ソロモン王その通りせしに、アたちまち王を嘔のみ、他に一足を駐とめて両翅を天まで伸ばし、四百里外に王を吐き飛ばすを知る者なかつた。かくてこの鬼、王に化けてその位に居る。ソロモン落魄らくはくして、乞食し「説法者たるわれはかつてエルサレムでイスラエルに王たりき」と言い続く、たまたま会議中の師父輩が聞き付けて、阿房あほの言う事は時々変るに、この乞食は同じ事のみ言うから意味ありげだとあつて、内臣にこの頃王しばしば汝を見るやと問うと、否いなと答えた。由つて諸妃を訪うて、その房へ王来る事ありやと尋ねると、ありと答

えた。そこで諸妃に注意して、王の足はどんな形かと問うた。けれど鬼の足は鶏の足のようだからだ。諸妃答えたは、王は不断半履はんぐつを穿はきて足を見せず、法に禁ぜられ居る時刻に、強いてわれわれを姪し、また母后バトシエバを犯さんとして、従わぬを怒り、ほとんど片裂せんとしたと。諸師父、さては妖怪に極きまつたと急いで相集まり、印環と強勢の符籙ふろくを鑄えり付けた鎖を、乞食体の真王に渡し、導いて宮に入ると、今まで王位に座しいたアスモデウス大いに叫んで逃れ去り、ソロモン王位に復したと。ヘブリウの異伝には、アスモデウス身を隠してソロモン王の妃に通ぜしに、王その床辺に灰を撒布し、旦あしたに鶏足ごとき跡を印せるを見て、鬼王の所為しよゐを認めたりという。この鬼の足、鷺足に似たりとも、鶏足

に似たりともいう。

ドイツの俚説に灰上にあひる家鴨や鶩の足形を印すれば、もつりよう罔 両 あ

りと知るといふ（タイラー『原始人文篇』二板、二卷一九八頁）。

東西洋ともに鬼の指を鳥の足のごとく画くは、過去地質期に人間の先祖が巨大異態の爬虫類と同時に生存して、いた甚く怪しみ、怖れた遺風であろう。知人故ウイリヤム・フォーセル・カービー氏の

『エストニアの勇士篇』にも諸国こうりゆう蛟 竜はなしの誕は右様の爬虫類、

遠い昔に全滅したものよりてんか転訛したであろうと言われた。実際鳥と

爬虫とその足跡分別しがたいもの多く、『五雜俎』九の画竜三停

九似の説にも、爪鷹に似るとあり。『せんがいきよう山海經』の罔などに見

るごとく、竜と鬼とは至って近いもの故、鬼の足、また手を鳥足

ごとく想像したと見える。灰を撒いて鬼の足跡を検出する事は、拙文「幽霊に足なしという事」について見られよ。

鶏の靈驗譚は随分あるがただ二、三を挙げよう。『諸社一覽』

八に『太神宮神異記』を引いて、豊太閤の時朝鮮人來朝せしに、食用のためとて太神宮にいくらかもある鶏を取り寄せ籠かごに入れてあまた上せけるに、ほどなく皆返さる。これは朝鮮人の食物に毛をむしりたる鳥、俎まないたの上にて生きて起たち上り時を作りけるに因ると。また『三国伝説』を引いて、三島の社に目潰めつぶれたる鶏あり。いつも暗ければ時ならず時を作り、朝夕を弁わきまえず。風霜に苦しみ、食に乏しく、瘦やせ衰あわれうるを愍あわれみ、ある修行者短冊を書き、鳥の頸に付くるに、たちまち目開く、その歌は「には鳥のなくねを神の聞

きながら心強くも目を見せぬかな」とある。

耶蘇教国にもややこの類の話がスペインにある。昔青年あり老父母とサンチアゴ・デ・コンポステラへ巡礼に出た。サンチアゴ（英語でセント・ジエームス、仏語でサン・ジャク）大尊者はキリストの大弟子中、ペテロにつ亜いだ勢力あり。その弟、ジョアンとともにキリストの雷子と呼ばれる。後殉教に臨みこれを訴えし者、その為ひととなり人に感動され、たちまちわれもまたキリスト教徒なりと自白し、伴い行きて刑に就く。途上尊者に向い罪を謝し、共に斬首された。この尊者かつてスペインに宣教したてふ旧伝あつて、八三五年にイリアの僧正テオドミル、奇態な星に導かれてその遺体を見出してより、そこをカンポ・ステラ（星の原）、それが転

じてコンポステラと呼ばれたという。コンポステラの伽藍がらんに尊者の屍を安置し靈驗灼然とあつて、中世諸国より巡礼日夜至つて、押すな突くなの賑にぎわい劇はげしく、欧州第一の参詣場たり。因つてスペイン人は今も銀あまのがわ河をエル・カミノ・デ・サンチアゴ（サンチアゴ道）と呼ぶ。これ『塩尻』卷四六に、中古吉野初瀬詣もつで衰えて熊野参り繁昌し、王公已下道者の往来絶えず、したがつて蟻ありが一道を行きてやまざるを熊野参りに比したとあり。今も南紀の小児、蟻を見れば「蟻もダンナもよつてこい、熊野参りにしようら」と唱うるは、昔熊野参り引きも切らざりし事、蟻群の行列際限を見ざるようだったに基づく。それと等しく銀河中の星の数、言語に絶して夥しきを、サンチアゴ詣での人数に比べたのだ。そのサ



ンチアゴ・デ・コンポステラへ老父母と伴れて参る一青年が、途上サンドミンゴ・デラ・カルザダで一泊すると、宿主の娘が、一と目三井寺こが焦るる胸を主は察して晩くれの鐘と、その閨ねやに忍んで打ち口くど説けど聞き入れざるを恨み、青年の袋の内へ銀製の名器を入れ置き、彼わが家宝を盗んだと訴え、青年捕縛されて串刺くしぎしに処せられた。双親老いて若い子の冤えんけい刑に逢い、最も悲しい悲しさに涙の絶え間なしといえども、さてあるべきにあらざれば志すサンチアゴ詣でを済まし、三人伴れて出た故郷へ二人で帰る力なき、せめて今一度亡児の跡を見収めにとサンドミンゴに立ち寄ると、確かに刑死を見届けたその子が息災で生きいた。これ全くサンチアゴ大尊者の靈驗、世は澆ぎょう季きに及ぶといえどもと、お定まりの

文句で衆人驚嘆せざるなし。所の監督食事中この報に接し、更に信ぜず。確かに死んだあの青年が活き居るなら、ここにある鶏の焼き鳥も動き出すはずと、言いおわらざるに、その鶏たちまち羽生え時を作り、皿より飛び出で遁げ去つた。やがて宿主の娘は刑せられ、この靈験の故に鶏を神使と崇め、サンドミンゴの家々今に鶏毛もて飾らるという事じゃ（グベルナチスの『動物譚原』二卷二八三頁。参取。『大英百科全書』一五卷一三五頁。二四卷一九二頁）。

サウシーの『随得手録』三輯記する所はやや異なるなり。いわくサンドミンゴ・デラ・カルザダで一女巡礼男に据え膳を拒まれた意趣返しに、その手荷物中に銀の什器じゆうきを入れ窃盗と誣告ぶかくす。

その手荷物を検するに果して銀器あり。因つて絞殺に処せられ、屍を絞架上に釣り下げ置かる。かの男の父、その子の成り行きを知らず、商いしてここへ来ると、絞台上から子が父を呼び留め、仔細を語り、直ちにその冤を奉行に報ぜしむ。奉行ちようど膳に向い、鶏、一ひとつが番いを味わわんとするところで、この鶏復活したらそんな話も信ぜられようと言うや否や、鶏たちまち羽毛を生じて起ち上つた。大騒ぎとなつてかの男を絞架より卸したとあれど、そのしまいは記されず。ただしその絞架を寺の上に据え、その時復活した白い雌雄の鶏を祭壇の側に畜やしうたが、数百年生きていたと。サウシーの『コンポステラ巡礼物語』はこれを敷ふえん衍したものだ。件くだんのサンチアゴ大尊者は、スペイン国の守護尊として特に尊

ばれ、クラヴィホその他の戦場にしばしば現われてその軍を助けたという。

カンポステラに詣で、これを拝する者は、皆杓子貝しゃくしがいを佩ぶお。その事日本の巡礼輩らが杓子貝を帯ぶるに合うとは、多賀や宮島に詣る者、杓子を求め帰るを誤聞したものか。英国にも杓子貝を紋とする貴族二十五家まであるは、昔カンポステラ巡礼の盛大なりしを忍ばせる。

昔この尊者の遺体を、大理石作りの船でエルサレムよりスペインへ渡す。ポルトガルの一武士の乗馬これを見、驚いて海に入ったのを救い上げて見ると、その武士の衣裳全く杓子貝に付き覆おおわられた。靈験記念のためこの介かいを、この尊者の標章とする由。英

国ではこの尊者の忌日、七月二十五日に牡蠣かきを食べば年中金乏しからずとて、価おしを吝おしまずこの日売り初めの牡蠣を食い、牡蠣料理店大いに忙し。店に捨てた多くの空あき殻がらを集めて小児が積み上げ、その上に蠟燭ともを点し、行人に一錢を乞いてその料とす。定めて杓子貝に近いもの故だろう（チャンバースの『ブック・オヴ・デイス』二卷一二二頁。ハズリット『諸信および俚伝』二卷三四四頁）。

鶏に係わる因果譚や報応譚は極めて多い。今ただ二、三を掲ぐ。『新著聞集』酬恩篇に、相馬家中の富田作兵衛二階に仮寝した夢に、美女来つて只今我殺さるるを助けたまわば、末々御守りとも成らんとす。起きて二階を下り見れば、傍輩ども牝鶏を殺す所

なり。只今かかる夢を見しこの鳥、我にと、強いて乞い受け、日比谷の神明に放つ。殿の母公聞きて優しき事と、作兵衛に樽肴を賜わる。その後別の奉公のちの品もなきに、二百五十石新恩を拝領せしは、寛文中の事とあり。またその殃禍篇おうかへんに、美濃の御嶽村おんたけの土屋某、日来好んで鶏卵ひじろを食いしが、いつしか頭ごとごとく禿はげて、後鶏のちの産毛うぶげ一面に生じたと載す。支那でも周の武帝鶏卵を好き食い、拔ばつひよう彪ひょうなる者、御食を進め寵せらる。隋朝起つてなお文帝に事つかえ食を進む。この人死後三日よみがえに蘇り、文帝に申せしは、死して冥府めいふに至ると、冥府の王汝武帝に進めし白団はくだんいくばくぞと問う。彪、何の事か解せず。傍の人、白団とは鶏卵じやと教えただので、武帝が食うた卵の数は知れぬと答う。しからば帝食うた

だけの卵を出すべしとて、牛頭ごずじん人身しんの獄卒ごくそくして、鉄床かなとこ上に臥ふしたる帝を鉄梁てつりやうもておき圧えしむるに、両肩裂けて十余石ばかりの卵こぼれ出いづ。帝、彪ひょうに向い、汝娑婆しやばに還つて大隋天子に告げ、我がこの苦を免れしめよと言うたと。文帝、すなわち天下に勅し、每人一錢を出して武帝の追福を修めたそうだ（『法苑珠林』九四）。

こんな詰つまらぬ法螺ほらばなし談だんも、盗跖とうせきは飴あめを以もつて鑰かぎを開くひらくの例で、随分有益な参考になるといふのは、昨今中央政府の遣り方の無鉄砲むてっぽうに倣なまい、府県争きんうて無用の事業を起し、無用の官吏を置くに随したがひ、遊興税ゆうきんぜいから庭園税ていゑんぜい、それから何々と、税ぜい目日もくに新たなるを加くわうる様子だが、ややもすれば名は多少違いながら、実は同じ物

から、二重三重取りになるから、色々抗議が出る。そこで余は  
 隋帝の故智こちに倣い、秀吉とか家康とか種々雑多の人物が国家のた  
 めに殺生した業報ごつぼうで、地獄に落ちおるのを救うためと称して、  
 毎度一人一錢ずつの追福税を嚴課し、出さぬ奴の先靈もたちまち  
 地獄へ落ちると脅おどしたら、何がさて大本教を信ぜぬと目が潰れる  
 など信ずる愚民の多い世の中、一廉ひとかどの実入りを収め得るに相違  
 ない。末広一雄君の『人生百不思議』に曰く、日本人は西洋人と  
 異なり、神を濫造し、また黜陟ちゆうちよく変更すと。既に先年合祀ごうしを強  
 行して、いわゆる基本財産の多寡を標準とし、賄贈請託わいぞうを魂こんた  
 胆たんとし、邦家発達の次第かんだいを攷かんがうるに大必要なる古社を滅却し、  
 一夜造りの淫祠を昇格し、その余弊今に除かれず、大いに人心蕩と



うらん 乱、氣風壞敗を致すの本もととなつた。しかし毒食らわば皿までじや。むしろその事、葬式、問ひ弔いを官營として坊主どもを乾ほし上げ、また人ごとに一錢の追福税を課し、おののたかむら小野篁などこの世と地獄を懸け持ちで勤務した例もあり、せせこましい官吏どもに正六位の勲百等のと虚号をやつたつて何の役に立たず、恐敬もされぬから、大抵人民を苦しめた上は神をすら濫造黜陟する御威勢で、それぞれ地獄の官職に榮転させ、中国で貨幣えがを画き焼いて冥府へ届くるごとく、附け木へ六道錢を描いて月給に遣わすべしだ。それから今一つよい税源は、余が大正二年八月十四日の『不二新聞』へ書いた通り十四世紀のエジプト王ナーシルは、難渋な財政を救うべく、毎つねに女官をして高位の婦女の隱事を檢せしめ、不貞

税というやつを重く取り立てた。同世紀に文化を誇った仏国にも、ロア・デ・リボー（淫猥王）わが邦中古傀儡の長吏様の親方が所々にあつて本夫外の男と親しむ女人より金五片ずつの税を徴した（ミュアアの『埃及奴隸王朝史』八三頁、ジュフルの『売鬻史』四卷二四頁）。現今わが邦男女不貞の行い夥しく、生温い訓誡や、説法ではやむべくもあらざれば、すべからくこれに禁止税を掛くるべく、うるさく附け纏われて程の知れぬ口留め料を警官や新聞に取らるるより、一と思いに取つてくださる、御国のためだと思つてすれば、天井で鼠が忠と鳴くと、鼠鳴きして悦び合い、密会税何回分と纏めて前以て払い済ます事疑いなし。これほど気の利いた社会政策はちよつとなかろう。

増訂漢魏叢書本『搜神記』卷二に地獄の官人の話あり、鶏に關  
 係ある故ここに略説する。太原たいげんの人、王子珍、父母の勧めによ  
 り、定州の辺孝先生に学ばんとて旅立つた。辺先生は漢代高名  
 の大儒で、孔子歿後ただ一人と称せらる。子珍、定州界内に入り  
 て路傍の樹蔭やすに息む所へまた一人来り憩いこい、汝は何人なんびとで何処どこへ  
 往くかと尋ねた。子珍事由を語ると、その人我は渤海ぼっかい郡の生ま  
 れ、李玄石と名づく、やはり辺先生の所へ学びに往く、かく道伴  
 れとなる已いじょう上は兄弟分になろうと言ひ出たので、子珍も同意し、  
 定州に至り飲酒食肉し、死生、貴賤、情皆これを一にせんと誓い  
 おわつて辺先生を訪い入門した。経業を学ぶ事三年にして玄石の  
 才芸先生に過ぎたから、先生玄石は聖人であろうと讃めた。子珍

その才の玄石に劣れるを知り、毎つねにその教授を受け師父として敬つた。後のち子珍と同族で、同地生まれの王仲祥という人來合せ、まづ先生に謁し、次ぎに子珍の宿に止まり、李玄石を見、翌日別れに臨み、子珍に、汝の友玄石は鬼きだ、生きた人でないと告げると、子珍、玄石はこれ上聖の聖で、經書該博ならざるなく、辺先生すらこれを推歎す、何ぞこれを人でないと言うべきと答えた。仲祥、我は才芸を論ずるでない、確かに彼を鬼と知つて言うのだ。汝もし信ぜずば今夜新しい葉むしろを席の下に鋪しいて、別々に臥ふしどして見よ、明朝に至り汝の榻下とうかの葉は実するも、鬼の臥所の葉は虚むなしかるべしと言うて別れ出た。夜に及んで仲祥の言に従い試みると、曉あけに及び果してその通りだったから、翌日玄石に、君は鬼だという噂うわさ

がある、本当かと問うと、玄石、誠に我は鬼だ、この事は仲祥から聞いただろう、我冥司に挙用されて、泰山の主簿たらんとするも、学薄うして該通ならず。冥王の勧めに従い、辺先生に業を求めんとするに人間が我を懼おそるるを憚り、人に化して汝と同師に事つかえ、一年を経ずして学問既に成り、泰山主簿に任じて二年になるが、兄弟分たる汝と別るるに忍びず、眷けんれん恋相伴うて今に至つた。既に実情を知られた上は久しく駐とどまるべきでないから別れよう、しかるに汝に知らさにやならぬ一事あり、前日汝の父の冤家が、冥王庁へ汝の父にその孫や兄弟を食われたと訴え出たが、われ汝と縁厚きによりすみやかに裁断せず、冥王これを怒つて我を笞むちうつ事一百、それより背が痛んでならぬ、さて只今王が汝の父を喚よ

び寄せ、自ら訊問し判して死籍に入れるところだから、汝急いで家に帰れ、さて父がまだ息しいたら救い得る故、清酒、鹿脯ろくほを供えて我を祭り、我名を三度呼べ、我必ず至るべし。もし気絶えいたら救いようがない。汝すでに学成つたから努力して立身を謀れはか、我まさに汝を助けて齡よわいを延ばし、上帝に請いて汝に官榮を与うべし、また疾病なきを保せんと言つて別れた。

子珍すなわち辺先生を辞し、家に帰つて父を見るに、なお息しているので、火急に酒脯錢財を郊に致しいた、祭り、三たびその名を呼ぶと、玄石白馬に乗り、朱衣を著つけ、冠かん蓋がい前後騎従数十人、別に二人の青衣あつて節を執つて前引し、呵殿かでんして来り、子珍相見あひまえて一いっに旧時のごとし。玄石、子珍に語るよう、汝眼を閉じよ、

汝を伴れ去つて父を見せようと。珍目を閉づるに須臾しゆゆにして閻羅えんら王所の門に至り北に向つて置かる。玄石、子珍に語つたは、向きさに汝を伴れて汝の父を見せんと思ひしも、汝の父、今牢獄にあつて極めて見苦しければ、今更見るべきにあらず。暫くの内に汝が父の冤家がここへ来る、白衣を著き、跣足はだしで頭に紫巾いただを戴き、手に一卷の文書を把とる者がそれだ。その人は晡くれ時にこの庁に入つて証問さるるはずだ。われ汝に弓箭を与え置くから、それを取つてかの人来るを候うかがい、よくこれを射殺さば汝の父は必ず活くべきも、殺し損わば救いがたいという内に、果して右様の人がやつて来た。玄石サアこれだ、我は役所に入つて判決するから、汝はしつかりやれと言つて去つた。いくばくならずして冤家直ちに案前あんぜんに来

り、陳訴する詞ことば至つて毒々し。子珍矢を放つと、その左眼に中あたり、驚いて文書を捨て置き走り出た。文書を取つて読むに、子珍の父の事を論じあつた。珍泣いて玄石に告げると、射殺さなんだは残念だ、眼が癒えたらますますうった訟えるに相違ない。汝よろ宜しく家に帰り冤家を尋ね出して殺すべし。しかれば汝の父はきつと癒るといふ。珍、何人を尋ねべきやと問うに、今汝が射たと似た者を見れば、やにわに射殺せと教えた。珍、倉そうこう皇別れ、歸つて、冤家の姓名を知らねば誰と尋ねべきにあらず。思い悩みて七日食わず。その時家人報ずらく、飼い置いた白い牡鶏が、この七日間行き所知れずと。因つて一同尋ねてその白鶏が架かし牆ようの上に坐せるを見出すに、左の眼損えり。王子珍考えて、玄石が言うたところの白衣は



白鷄の毛、紫巾を戴くとは鷄冠、跣足とは鷄の足、左の眼潰つぶれた  
 るは我が射中あてたのだ。この鷄こそ我父の冤家なれと悟り、殺し  
 烹にて汁にして父に食わすと平癒した。子珍、後に出世して太原の  
 刺史となり、百三十八歳まで長生したは李玄石の陰いんゆう祐による。  
 へ故にいわく、鷄三年ならず、犬六載ならず、白鷄白犬これを食  
 うべからず、生を害うなりとある。わが邦で猫を飼う初めに何  
 年と時を定めて飼うと、期限来れば去つてまた来らず。余り久し  
 く飼えば猫ねこまた又ねこまたに化け「猫じゃ猫じゃとおっしゃりますな、アニ  
 ヤニヤニヤンノニヤン」と謡い踊るといふごとく、晋時支那では、  
 鷄を三年、犬を六載以上飼わず、白い犬鷄は必ず食わぬものでこ  
 れを食えば冥みょうぼつ罰ばつを受くると信じたのだ。今も白鷄は在家ざいけに過

ぎたものとし、寺社に専ら飼う所あり。讚岐琴平さぬきことひらに多く畜かう

(『郷土研究』二卷三号、三浦魯一氏報)、『古語拾遺』に、白

鶏、白猪、白馬もて御歳みとしの神を祭ると見え、『塩尻』四にへ『地

鏡』に曰く、名山に入るには必ずまず齋すること五十日、白犬を

牽き白鶏を抱き云々。ゴムの『歴史科学としての民俗学』三十

一頁に、インドのカツボア人は、白鶏を牲にえして隠財を求むといひ、

コラン・ド・ブランシーの『遺宝霊像評彙』一卷六四頁には、天

主教徒白鶏をクリストフ尊者に捧げて、指端の痛みを癒いやしもらう。

他の色の鶏を捧ぐればますます痛むと見ゆ。熊野地方では天狗が

時に白鶏に化け現わるといふ。支那湖南の衡州府華光寺に、昔禪

師あつて白鶏を養う。経じゆを誦じゆすることに座に登つて聴く。死して

寺側に埋めし上に白蓮花を生じ、花謝して泉水涌き出づ。白鷄泉と名づく（『大清一統志』二二四）。

諸国あまねく白鷄を殊勝の物としたのだ。

（大正十年二月、『太陽』二七ノ二）

## 3

『甲子夜話』統一七にいわく、ある老人耳聞えず、常に子孫に小言をいう。ある日客ありし時に子供を顧みて物語るは、今時の者はどうも不性なり。我らが若き時はかようにはなしという時、飼かたわらい置きし鷄側より時をつくる。老人いわく、あれ聞きたまえ人ば

かりでなし、鶏さえ今時は羽は敲たたきばかりして鳴きはしませぬと。

かかる話は毎度繰り返さるるもので、数年前井上馨侯耳聾して、

浄瑠璃語りの声段々昔より低くなつた、今の鶏もしかりとつふや呺いた

と新紙で読んだ。またいわく、ある侍今日は殊ひよりに日和よしとて田

舎ゆきんへ遊山に行き、先にて自然じねん薯じよを貰もらい、僕しもべに持せて還る中途とび鳶

に攫つかみ去らる、僕主に告ぐ、油あぶら揚あげならば鳶も取るべきに、薯いも

は何にもなるまじと言え、鳶、樹梢で鳴いてヒイトロロ、ヒイ

トロロ。一八九一年オックスフォード板、コドリングトンの『ゼ

・メラネシアンス』に、癩人島の俗譚に十の雛ひなもてる牝鶏が雛を

つれて食を求め、ギギンボ（自然薯の一種）を見付けるとその薯

根た起ち出て一雛を食うた。由つて鳶を呼ぶと鳶教えて一同を自分

の下に隠す、所へ薯来つて、鳶汝は鷄雛の所在を知らぬかと問うに、知らぬと答え、薯怒つて鳶を罵るのし。鳶すなわち飛び下つて薯を掴つかみ、空を飛び舞いて地へ墮おとすを、他の鳶が拾うて空を飛び廻つてまた落すと、薯二つに割れた。それを二つの鳶が分ち取つたから薯に味良いのと悪いのがあるようになったというと記す。面白くも何ともない話だが、未開の島民が薯に良し悪しあるを知つて、その起因を説くため、かかる話を作り出したは理想力を全然けつじよ闕如せぬ証左で、日本とメラネシアほどいた太く距へだたつた両地方に、偶然自然薯と鳶の話が各々出で来た。その偶合がちよつと不思議だ。

鶏を入れた笑談を少し述べると、熊野でよく聞くは、小百姓が

耕作終つて歸りがけに、鳥がアホウクワと鳴くを聞いて、鋤くわを忘れたと氣付き、取り歸つてさすがは鳥だ、内の鶏なんざあ何の役にも立たぬと誹そしると、鶏憤そしつてトテコーカアと鳴いたという。

『醒睡笑』二に、若衆あり、念者に向いて、今夜の夢に、鶏せいすいししょう

のひよこを一つ金にて作り、我に給いたるとみたと語ると、我も只今の夢にそのごとくなる物を参らせると、いやといつてお返しあつたと見た事よとある。西洋にはシセロ説ねじこに寢床ねじこの下に鶏卵一つ匿かくされあると夢みた人が、判じに往くと、占うて、卵が匿かくされ居ると見た所に財貨あるべしと告げた。由つて掘り試むるに、銀あつて中に夥しく金を裏つめり、その銀数片を夢判じにやると、銀より金が欲しい思おぼし召おぼしから、卵黄きみの方も少々戴おきたいものだ

言うたそうな。一五二五年頃出た『百笑談』てふ英国の逸書に、  
田舎住居ずまいの富人が、一人子をオックスフォードへ教育にやって、  
二、三年して学校休みに帰宅した、一夜食事前に、その子、我日  
常専攻した論理学で、この皿に盛った二鶏の三鶏たるを証拠立つ  
べしというので、父それは見ものだ、やって見よ、と命ずると、  
その子一手に一鶏を執ってここに一鶏ありといい、次に両手で二  
鶏を持ってここに二鶏ありといい、一と二を合せば三、故に総計  
三鶏ありと言うた。その時父自ら一鶏を取り、他の一鶏を妻に与  
えて、子に向い、一つは余、今一つは汝の母の分とする。第三番  
めの鶏は汝の論理の手際で汝自ら取って食べ、と言ったので、子  
は夜食せずに済ませた。だから鈍才の者に理窟を習わすは、大い

に愚な事と知るべしと出づ。先頃手に鶏を縛るの力もないくせに、  
ひとかど一 廉労働者の先覚顔して、煽動した因果てきめん覲面、ちよつとした  
 窓の修繕や半里足らずの人力車を頼んでも、不道理極まる高い賃  
 を要求されて始めて驚き、自ら修繕し、自ら牽き走ろうにも力足  
 らず、労働者どもがそんなに威張り出したも誰のおかげだ、義理  
 知らずめと詈つても取り合つてくれず、身から出た錆さびと自分を恨  
 んで、ひもじく月を眺め、ひざくりげ膝栗毛を疲らせた者少なくなかつた  
 は、右の富人の愚息そのままだ。かく似て非なる者を、仏経には  
うこつけい烏骨鶏うこつけいに比した。

六群びく比丘びくとて仏弟子ながら、毎も戒律を破る六人の僧あり。質  
 帝隸居士、百味の食を作り、清僧を請じ、余り物もてこの六比丘



を請ぜしに、油と塩で熬にた魚をくれぬが不足だ。それをくれたら施主が好よき名誉を得ると言うた。居士曰く、過去世に群鷄林中に住み、狸に侵し食われて雌鷄一つ残る。鳥来つてこれに交わり一子を生む、その子鷄の声を聞きて父の鳥が偈げを説いて言うたは、この児、我が有にあらず、野父と聚落母が共に合いてこの子あり、鳥でもなく鷄でもなし、もし父の声を学ばんと欲せば、これ鷄の生むところ、もし母の鳴くを学ばんと欲せば、その父は鳥なり。鳥を学べば鷄鳴に似、鷄を学べば鳥声を作なす。鳥鷄二つながら兼ね学べば、これ二つとも成らずと。そのごとく魚を食いたがる貴僧らは俗人でも出家でもない。仏これを聞いて、この居士は宿命通を以て六群比丘が昔鷄と鳥の間の子たりしを見通しかく説

いたのじやと言ふた（『摩訶僧祇律』三四）、『沙石集』三に、  
 質多居士は在俗の聖者で、善法比丘てふ腹悪き僧、毎にかの家に  
 往つて供養を受く、ある時居士遠来の僧を供養するを猜み、今日  
 の供養は山海の珍物を尽されたが、ただなき物は油あぶらかす糟せうばかり  
 と悪口した。居士油を売つて渡世するを譏つたのだ。そこで居士、  
 只今思い合す事がある、諸国を行商した時、ある国に形は常の鶏  
 のごとく、声は鳥のようながあつた。鳥が鶏に生ませたによつて  
 形は母、音は父に似る故鳥鶏うけいと名づくと聞いた。貴僧も姿は沙門、  
 語は在家の語なるに付けて、かの鳥鶏が思い出さると、やり込め  
 られて、善法比丘無言で立ち去つたとある。すべて昔は筆紙乏し  
 く伝習に記憶を専らとした故、かく少しづつ話が変わつていったも

のだ。烏が鶏に生ませた烏鶏とは、うこっけい烏骨鶏だ。色が黒い故かか  
 る説を称えたので、その頃インドに少なかったと見える。ただし  
 烏骨鶏に白いのもあつて、大鬼が小鬼群を引きつけて心腹病を流行はや  
 せに行く最後の一小鬼を、夏侯かこうこう弘が捉え、問うてその目的を知  
 り、治方を尋ねると、白い烏骨鶏を殺して心しんに当てよと教う。弘  
 これを用いて十に八、九を癒した由（『本草綱目』四八）。

十六世紀に出たストラパロラの『面白き夜の物語』（ピヤツエ  
 ヴオリ・ノツチ）十三夜二譚は余未見の書、ソツジニが十五世紀  
 に筆した物より採るといふ。人あり、百姓よりえんけい闇鶏数羽を買い、  
 ある法師、その価を払うはずとて伴れて行く。既に法師の所に至  
 り、その人法師にささや囁き、この田舎者は貴僧に懺悔を聴いてもらう

ため来たと言ひ、さて、大声で上人即刻対面さるるぞと云うて出  
て行く。百姓は鶏代の事を法師に告げくれた事と心得、かの人の  
去るに任す。所へ法師来たので金を受け取ろうと手を出すと、法  
師は百姓に、ひざまず跪いて懺悔せよと命じ、自ら十字をえが画き、げ偈を誦し  
始めた。これに似た落語を壮年の頃東京の寄席で聴いたは、さる  
男、吉原で春を置いて勘定無一文とは兼ねての覚悟、つ附け馬男を  
随えて帰る途上、一計を案じ、知りもせぬ石切屋に入りてその親  
方に小声で、門口に立ち居る男が新死人の石碑を註文に来たが、  
町不案内故通事つうじに来てやったと言ひ、さて兩人の間を取り持ち種  
々応対する。用語いづれも意義二つあつて、石切屋には石の事、  
附け馬には遊興の事とばかり解せられたから、兩人相疑わず、一

人は急ぐ註文と呑み込んで石碑を切りに掛かれば、一人は石を切り終つて揚代あげだいを代償さると心得て竣まつ内、文なし漢は兩人承引の上はわれここに用なしと挨拶して去つた。久しく掛かり碑を切り終つて、互いに料金を要求するに及び、始めて食わされたと分るに及ぶ。その詐欺漢が二人間を通事する辞ことばなかなか旨うまく、故正岡子規、秋山真之など、毎度その真似をやつていたが余は忘れしまった。今もそんな落語が行わるるなら誰か教えてくだされ。

ストラパロラくだんの件の話にあるえんけい鰯いけい、伊語でカツポネ、英語でカポンは食用のため肥やさんとして去勢された鶏だ。本篇はキンダマの講釈から口を切つて大喝采を博し居るから、鰯いけいのついでに今一つキンダマに関する珍談を申そう。一一四七年頃生まれ七十

四歳で歿したギラルズスの『イチネラリウム・カムブリエ』に曰くさ、ウエールスのある城主が、一囚人の鞆丸と両眼を抜き去つて城中に置くに、その人、砦内の込み入りたる階路をことごとくよく記憶し、自在にその諸部に往来す。一日彼城主の唯一の子を捉え、諸の戸を閉じて高き塔頂に上る、城主諸臣と塔下に走り行き、その子を縦<sup>ゆる</sup>さば望むところを何なりとも叶<sup>かな</sup>えやろうと言うたが、承知せず、城主自ら鞆丸を切り去るにあらずんばたちまちその子を塔上より投下すべしと言い張つた。何と宥<sup>す</sup>めても聴き入れぬ故、城主しかる上は余儀なしとて、鞆丸を切つたような音を立て、同時に自身も諸臣も声高く叫んだ。その時、盲人城主にどこが痛いかと問い、城主腰が烈しく痛むと答えた。盲<sup>めくら</sup>と思うて人を

だまそうとは怪けしからぬと罵つて、子を投げそうだから、城主更  
 に臣下して自身を健したたか打たしめると、盲人また今度は一番どこが  
 疼いたいかと問うた。心臓と答うると、いよいよ急ぎ投げそうに見え  
 る。ここにおいて父やむをえず、板はながく額は門破り、荒木又右衛門  
 は関所を破る、常磐御前とこの城主はわが子のために、大事な  
 操と陰ふんぐり囊破ると、大津絵おおつえどころか痛い目をしてわれとわが手で  
 両丸くり抜いた。さて、今度はどこが一番疼むかと問うに、対こたえ  
 て歯がひどく疼むというと、コイツは旨い。本当だ「玉抜いてこ  
 そ歯もうずくなれ」。汝は今後世せいし嗣を生む事ならず一生楽しみを  
 享うけ得ぬから、余は満足して死すべしと言いおわらざるに、盲人、  
 城主の子を抱いて塔頭より飛び降り、形も分らぬまで砕け潰れ終

った。されば悒りんき氣深い女房に折せつ檻かんされたあげくの果てに、去勢  
 を要求された場合には、委細承知は仕れど、鰻やスツポンと事異  
 なり、婦人方の見るべき料理でない。あちらを向いていなさいと  
 彼方を向かせ、卒然変な音を立て高く号さけび、どこが一番疼いと聞  
 かれたら、齒が最も疼むと答うるに限る。孟軻もうかの語に、志士は溝  
 壑うがくにあるを忘れず、勇士はその元こうべうを喪うを忘れずと。余は昨今  
 のごとき騒々しい世にありて、キンダマの保全法くらいは是非嗜たしな  
 み置かねばならぬと存ずる。

ベロアル・ド・ヴェルヴィユの『上達方』に、鶏卵の笑談あま  
 たある。その一、二を挙げんに、マーゴ―てふ下女、座敷の真中  
 に坐せる主婦に鶏卵一つ進まいらする途中、客人を見て長ちようゆう揖ゆうする



刹那、屁をひりたくなり、力めて尻をすぼめる余勢に、拳を握り過ぎて卵を潰し、大いに愕おどろいて手を緩ゆるめると、同時に尻大いに開いて五十サンチの巨砲を轟とどろかしたが、さすがのしたたかもので、客の怪しみ問うに対してツイ豆をたべたものですからといったとある。その頃仏国でも豆は屁を催すと称えたのだ。全体この書は文句麁野そや、下筆また流暢ならず、とても及ぶべくもないが、古今名人大一座で話し合う所を筆記した体に造った点が、馬琴の『昔語質屋庫』にやや似て居る。たとえば医聖ガリアンが、ブロアの一少婦が子を産み、その子女なりと聞いて、女の子は入らぬ元所へ戻し入れておくれといったは面白いというと、古文家ボツジユが、緬羊児を買いてその尾に山羊児の尾を接ついだというのがあ

つて一層面白いという（ここ脱文ありと見え意義多少分らず）、アスクレピアデスは、牝鶏よく卵を生むと見せるため、その肛門に卵を入れ置いたをある女が買ったが、爾後一向卵を産まなんだと語る所がある。

西鶴の『一代男』二、「旅の出来心」の条、江尻の宿女せし者の話に「また冬の夜は寝道具を貸すようにして貸さず、庭鳥のとまり竹に湯を仕掛けて、夜深よふかに鳴かせて夢覚さまさせて追い出し、色々つらく当りぬるその報いかばかり、今遁のがれてのありがたさよ云々」。この湯仕掛けで鶏を早鳴はやなきせしむる法は中国書にもあつたと記憶する。木曾の松本平の倉科くらしな様ちゆう長者が、都へ宝競くらべにとて、あまたの財宝を馬に積んで木曾街道を上り、妻籠つまごの

宿に泊った晩、三人の強盜、途中でその宝を奪おうと企て、その中一名は宿屋に入つて鶏の足を暖め、夜更よふけに時を作らせて、まだ暗い中に出立させた。長者が馬籠峠まごめの小路に掛かり、字男垂あやおたるという所まで来た時、三賊出でて竹槍で突き殺し、宝を奪い去つた。その宝の中に黄金の鶏が一つ落ちて、川に流れて男垂の滝壺に入つた。今も元旦にその鶏がここで時を作るといふ。長者の妻、その後跡のちを尋ね来てこの有様を見、悲憤の余りに「粟稗のろたたれ」と詛のろうた。そのために後日、向山という所大いに崩れ、住民困くるしんで祠ほこらを建て神に祀まつつたが、今も倉科様てふ祠ある（『郷土研究』四卷九号五五六頁、林六郎氏報）。阿波の国那賀郡桑野村の富人某方へ六部来て一夜の宿をとつた。主人その黄金の鶏と、一寸四方

の箱に収まる蚊帳かやを持ちいると聞き、翌朝早く出掛けた六部の跡をつけ、濁りが淵で斬り殺した。鶏は飛び去ったが蚊帳は手に入つた。その六部の血で今も淵の水赤く濁る。その家今もむした餅を搗つかず、搗けば必ず餅に血が雑まじるのでひき餅を搗く。蚊帳は現存す（同上一巻二号一一七頁、吉川泰人氏報）。

『甲子夜話』続一三に、ある人曰く、大槻おおつきげんたく玄沢げんたくが語りしは、

奥州栗原郡三の戸畑村の中に鶏坂さきというあり。ここより、前の頃純金の鶏を掘り出だしける事あり。その故を尋ぬるに、この畑村に、昔炭焼き藤太という者居住す。その家の辺より沙金を拾い得たり。因つてついに富を重ね、故に金を以て鶏形一雙を作り、山神を祭り、炭とともに土中に埋む、因つてそこを鶏坂という。

これ 貞 享 三年印本『藤太行状』というに載せたりと。また文  
 化十五年四月その農夫、沙金を拾わんため山を穿ちしに、岸の  
 崩れより一双の金鶏を獲たり。重さ百錢目にして、山神の二字を  
 彫り付けあり。この藤太は近衛院の御時の人にて、金商橘次、橘  
 内橘王が父なりと。今もその夫婦の石塔その地にあり云々。『東  
 鑑』へ文治二年八月十六日午の尅、西行上人退出す、しきりに抑  
 留すといえども、敢えてこれにかかわらず、二品（頼朝）銀を以  
 て猫を作り贈物に充てらる、上人たちまちこれを拝領し、門外に  
 おいて放遊せる嬰兒に与う云々。因つて思うにこの頃の人はか  
 くのごとくに金銀を以て形造の物ありしかと。元魏の朝に、南天  
 竺優禪尼国の王子月婆首那が訳出した『僧伽 經』三に、人あり、

樹を種ううるに即日芽を生じ、一日にして一由旬の長さに及び、花さき、実る。王自ら種え試みるに、芽も花も生ぜず、大いに怒つて諸臣をしてかの人種うえたる樹を斫きらしむるに、一樹を断てば十二樹を生じ、十二樹を切れば二十四樹を生じ、莖葉花果皆七宝なり。爾そのとき時二十四樹變じて、二十四億の鷄鳥、金の嘴、七宝の羽翼なるを生ずという。これもインドで古く金宝もて鷄の像を造る習俗があつたらしい。『大清一統志』三〇五、雲うんなん南に、金馬、碧鷄二山あり。『漢書』に宣帝神爵と改元した時、あるいは言う、益州に、金馬、碧鷄の神あり。醮しやうさい祭して致すべしと。ここに  
 おいて諫大夫王褒おうほうを遣わし、節を持ってこれを求めしむと。註に曰く、金形馬に似、碧形鷄に似ると。これも金で馬、碧すなわ

ち紺こんじょう青しょうで鶏を作り、神と崇あがめいたのであろう。本邦にも古く  
 太陽崇拜に聯絡して黄金で鶏を作り祀りしを、後には宝として蔵  
 する風があつたらしい。十一年前、余、紀州日高郡上山路村で聞  
 いたは、近村竜神村大字竜神は、古来温泉で著名だが、上に述べ  
 た阿波の濁りが淵同様の伝説あり。所の者は秘して語らず。昔熊  
 野詣りの比丘びく尼に一人ここへ来て宿る。金多く持てるを主人が見て  
 悪党を催し、鶏が止まる竹に湯を通し、夜中に鳴かせて、最早もはや曉  
 近いと欺き、尼を出立させ、途中に待ち伏せて殺し、その金を奪  
 うた。その時、尼怨うらんで永劫えいごうこの男が妻に先立って若死する  
 ようと詛のろうて絶命した。そこを比丘びく尼に剥はきぎという。その後果して竜  
 神の家毎つねに夫は早世し、後家世帯が通例となる。その尼のために

小祠を立て、齋いわい込んだが毎度火災ありて崇たたりやまずと。尼がかく詛うたは、宿主の悪謀を、その妻が諫いさめたというような事があつた故であろう。かつて東牟婁郡高池町の素封家、佐藤長右衛門氏を訪ねた時、船を用意して古座川を上り、有名な一枚岩を見せられた。十二月の嚴寒に、多くの人が鳶とびぐち口いかにで筏いかだを引いて水中を歩く辛苦を傷いたみ尋ねると、この働き、烈しく身に障さわり、真砂という地の男子ごとく五十以下で死するが常だが、故郷離れがたくて、皆々かく渡世すと答えた。竜神に男子の早世多きも何かその理由あり。決して比丘尼の詛いに由らぬはもちろんながら、この辺、昔の熊野街道で色々土人が旅客を困らせた事あつたらしく、西鶴の『本朝二十不孝』卷二「旅行の暮の僧そうろうにて候、熊野に娘優



しき草の屋」の一章など、小説ながら当時しばしば聞き及んだ事実に拠よつたのだろう。その譚はなしにも竜神の伝説同様、旅僧が小判多く持ったとばかり言うて、金作りの鶏と言わず、熊野の咄はなしは東北国のより新しく作られ、その頃既に金製の鶏を宝とする風なかつたものか。この竜神の伝説を『現代』へ投じた後数日、『大阪毎日』紙を見ると、その大正九年十二月二十三日分に、竜神の豪家竜神家の嗣子が病名さえ分らぬ煩いで困りおる内、その夫人に催眠術を掛けると俄にわかに「私は甲州の者で、百二十年前夫に死に別れ、悲しさの余り比丘尼になり、世の中に亡夫に似た人はないかと巡礼中、この家に来り泊り、探る内、私の持った大判小判に目がくれ、竜神より上山路村を東へ越す捷ちかみち徑、センブ越えを越す

途上、私は途中で殺され、面皮を剥いで谷へ投げられ、金は全部取られた。その怨みでこの家へ祟るのである」と血相変えて述べおわつて覺めたと出た。それに対して竜神家より正誤申込みが一月十九日分に出た、いわく、百五十年ほど前、一尼僧この地に來り、松葉屋に泊り出立せしを、松葉屋と中屋の二主人が途中で殺し、その金を奪うた報いで両家断絶し、今にその趾あとあり云々。これを誤報附会したのでないかと。この竜神氏、当主は余の旧知で、伊達千広（陸奥宗光伯の父）の『竜神出湯日記』に、竜神一族はみなもとのさんみよりまさ源三位頼政の五男、いづみのかみよりうじ和泉守頼氏この山中に落ち来てこの奥なる殿垣内とのがいとに隠れ住めり、殿といえるもその故なり。末孫、今に竜神を氏とし、名に政の字を付くと語るに、その古えさえ忍

ばれて「桜花本の根ざしを尋ねずば、たゞ深山みやまぎ木とみてや過ぎなむ」とあるほどの旧ふるい豪家故、比丘尼を殺し金を奪うはずなく全くの誤報らしいが、また一方にはその土地の一、二人がした悪事が年所を経ても磨滅せず、その土地一いっばん汎の悪名となり、気の弱い者の脳底に潜在し、時に発作して、他人がした事を自家の先祖がしたごとく附会して、狂語を放つ例も変態心理学の書にしばしば見受ける。

金製の鶏でなく正物の鶏を宝とした例もある。元魏の朝に漢訳された『付法蔵因縁伝』五に、馬めみよう鳴菩薩かしじよう華氏城に遊行教化せし時、その城におよそ九億人ありて住す。月支国げっし王名は梅檀せんたんいじった昵、この王、志気雄猛、勇健超世、討伐する所摧靡さいひせざるな

し、すなわち四兵を嚴にし、華氏城を攻めてこれを帰伏せしめ、すなわち九億金錢を索むもと。華氏国王、すなわち馬鳴菩薩と、仏ぶつ鉢と、一の慈心鶏を以て各三億金錢に当て、昵王に献じた。馬鳴菩薩は智慧殊勝で、仏鉢は如にょらい來が持った靈宝たり。かの鶏は慈心あり。虫の住む水を飲まず。ことごとく能く一切の怨敵おんてきを消滅せしむ。この縁を以て九億錢の償金代りに、この三物を出し、月支国王大いに喜んで納受したそうだ。これは実に辻褄の合はなしわぬ嘶で、いわゆる慈心鶏が一切の怨敵を消滅せしむる威力あらば、平生厚く飼われた恩返しに、なぜ華氏城王のために奮発して、月支国の軍を打破消滅せしめず、おめおめと償金代りに敵国へ引き渡しを甘んじたものか。

世間の事、必ず対偶ありで西洋にも似た話あり。十三世紀にコンスタンチノブル帝、ボールドウィン二世、四方より敵に囲まれて究迫至極の時、他国へ売却した諸宝の内に大勝十字架あり、これを押し立て、軍に趨けば必ず大勝利を獲というたものだが、肝心緊要の場合に間に合わさず、売ってしまったはさっぱり分らぬとジュロールの『巴里記奇』に出づ。例の支那人が口癖に誇つた忠君愛国などもこの伝で、毎々他国へ売却されて他国の用を做したと見える。警めざるべけんやだ。

一八九八年、ロンドン板デンネットの『フィオート民俗記』に、一羽の雌鶏が日々食を拾いに川端に之く。ある日鱷が近付いて食おうとすると、雌鶏「オー兄弟よ、悪い事するな」と叫ぶに驚き、

なぜわれを兄弟というたかと思案しながら去つた。他日今度こそきつと食つてやろうと決心してやつて来ると、雌鶏また前のごとく叫んだので、鱷、またなぜわれを兄弟と呼ぶだろう。我は水に、彼は陸上の町に住むにと訝いぶかり考えて去つた。何とも解げせぬから、ンザムビ（大皇女の義で諸動物の母）に尋ねようと歩く途上、ムバムビちゆう大蜥蜴とかげに逢い仔細を語ると、大蜥蜴がいうよう、そんな事を問いに往くと笑われる、全く以て恥暴さらしだ。貴公知らな  
いか、鴨は水に住んで卵を産みすつぽん籠もわれも同様に卵を産む。雌鶏も汝もまた卵を生めばなんとわれらことごとく兄弟であろうがのとやり込められて、鱷は口あんぐり、それより今に至つて鱷は雌鶏を食わぬ由、これは西アフリカには鱷がなぜか雌鶏を食わない

地方があるので、その訳を解かんとて作られた譚と見える。アラ  
ビヤの昔話に、賢い老雄鶏が食を求めて思わず識しらず遠く野外に  
出で、帰途に迷うて、為なす所を知らず、呆然として立ち居るとた  
だ見る狐一疋近づき来る。たちまち顧みると狐がとても登り得ぬ  
高い壁が野中に立つ、因つつて翅ばさを鼓してそれに飛び上り留まる。  
狐その下に来り上らんとしても上り得ず、種々の好辞もて挨拶す  
れど、鶏一向応ぜず。ただ眼を円くして遠方を眺める。その時狐  
が言い出たは、わが兄弟よ、獣の王たる獅子と鳥の王たる鷲わしが、  
青草茂れる広野に会合し、獅子より兎に至る諸獸と、鷲うずらより鶉うずらに  
至る諸禽とことごとく随従して命を聴かざるなし、二王ここにお  
いてあまねく林野藪そうたく沢たくに宣伝せしめ、諸禽獸をして相融和して

争闘するなからしめ、いささかも他を傷害するものあればこれを片裂すべしと命じ、皆一所に飲食歡樂せしむ。また特に余をして原野に奔走して洩れなく諸禽獸に告げ早く来つて二王に謁見しその手を吸わしむ。されば汝も速やかに壁上より下るべしと。鶏は更に聞かざるふりしてただ遠方を望むばかり故、狐大いにせき込んで何とか返事をなせしないと責むると、老鶏始めて口を開き、狐に向い、汝の言うところは分つて居るがどうも変な事になつて来たという。どう変な事と問うとアレあそこに一陣の風雲とともに鷹群が舞い来ると答える。狐大いに懼れて犬も来るんじやないか、しつかり見てくれと頼む。鶏とくと見澄ました体で、いよいよ犬が鮮やかに見えて来たというので、狐それでは僕は失敬する



と走り出す。なぜそんなに急ぐかというのと、僕は犬を懼おそれると答う。たった今鳥獸の王の使として、一切の鳥獸に平和を宣伝に來たと言うたでないか、と問うに、ウウそれはその何じや、獸類會議に犬はたしか出ていなかったようだ、何に致せ僕は犬を好かぬから、どんな目に逢うかも知れない、と言うたきり、跡をも見ずに逃げ行く見にくさ。鶏は謀計もて大勝利を獲、帰つてその事を群鶏に話した由（一八九四年スミツザース再板、バートンの『千一夜譚』卷十二の百頁已下）、昨今しばしば開催さるる平和會議とか何々會議とかの内には、こんなおどかし合いも少なからぬべしと参考までに訳出し置く。

ジェームス・ロング師の『トリプラ編年史』解説にいわく、こ

の国の第九十八代の王、キサングファーに十八子あり、そのいずれに位を伝うべきかと思案して一計を得、鬪鶏係りの官人をして、鬪鶏の食を断たしめ置き、王と諸王子と会食する時、相凶に従つて一斉に三十鶏を放たしめた。十分餓えいた鶏ども、争うて食堂に入つて膳を荒した。インドの風として鶏を不吉の物とし、少しでも鶏に触れられた食物を不浄として太く忌むのだ。しかるに王の末子ラトナファーのみ少しも騒がず、あり合せた飯を執つて投げるを、拾うて鶏が少しもその膳を穢さず、因つて末子が一番智慧ありと知れた。王歿して後、諸兄これを遠ざけ外遊せしめたが、ガウルに趨き<sup>おもむ</sup>回教徒の兵を仮り来て兵を起し、諸兄を殺し（一二七九年頃）、マンクの尊号を得、世襲子孫に伝えた。

孔雀は鶏の近類故このついでに孔雀の話の一つ申そう。一八八三年サイゴンで出たエーモニエーの『柬埔寨※人風俗信念記』に次の話がある。ある若者、その師より戒められたは、妻を娶るは若い娘か後家に限り、年取った娘や、嫁入り戻りの女を娶るなかれと。その若者仔細あつて師の言に背き、この四種の女を一度に娶った後、師の言の中れるや否やを験するため、謀つて王の最愛の孔雀を盗み、諸妻に示した後匿し置き、さて、鶏雛を殺してかの孔雀を殺したと詐り、諸妻に食わせた。若い娘と後家はこの事を秘したが、年取った娘と、嫁入り戻りの妻は大秘密と印した状を各母に送つてこの事を告げたので、明日たちまち市中に知れ、ついに王宮に聞えた。王怒つてその若者、および四妻を捕え刑せん

とした。若者すなわちその謀を王に白し、匿し置いた孔雀を還したので、王感じ入って不貞の両妻を誅した。爾来夫の隠し事を密告し、また夫を殺す不貞の婦女をスレイ・カンゴク・メアス（金の孔雀女）と呼ぶと。若い娘と後家が貞なる訳は後に解こう。

ウイリヤム・ホーンの『ゼ・イヤー・ブツク』の三月三十一日の条にいわく、一八〇九年三月三十日、大地震うてビークン丘とビーチエン崖と打ち合い、英国バス市丸潰れとなる由を、天使が一老婆に告げたという評判で、市民不安の念に駆られ、外来の客陸續ここを引き揚げたが、その事起るべきに定まった当日、正午になつても一向起らず、大騒ぎせし輩、今更軽々しく妖言を信じたを羞じ入った。この噂の起りはこうだ。ビークン丘とビーチ

ン崖の近所に住める二人の有名な養鶏家あつて、酒店で出会い、手飼いの鶏の強き自慢を争うた後、当日がグード・フライデーの佳節に当れるを幸い、その鶏を闘わす事に定めたが、公に知れてはチョイと来いと拘引は知れたこと故、鶏を主人の住所で呼び、当日正真の十二時に、ビークン山とビーチエン崖が打ち合うべしと定め、闘鶏家連に通知すると、いずれもその旨を心得、鶏という事を少しも洩らさず件くだんの山と崖とが打ち合うとのみ触れ廻したのを、局外の徒が洩れ聞いて、尾に羽を添えて、真に山と崖が打ち合い、市は丸潰れとなるべき予言と変わったのだ。ただし、当日定めの一鶏は、群集環視の間に闘いを演じたとあるが、勝負の委細は記さない。

鶏に名を付くる事諸国にありて、晋の祝鷄翁は洛陽の人、山東の尸郷北山下におり、鶏を養うて千余頭に至る。皆名字あり、名を呼ばばすなわち種別して至る。後呉山に之き終る所を知るなしとある（『大清一統志』一二四）。バートンの『東阿非利加初入記』五章にエーサ人の牛畜各名あり。斑、麦の粉などいう。その名を呼ぶに随い、乳搾られに来るとあれば、鶏にもそれほどの事は行われそうだ。『古今著聞集』承安二年五月二日東山仙洞で鶏合せされし記事に、無名丸、千与丸などいう鶏の名あり、その頃は美童や、牛、鷹同様、主として丸字を附けたらしい。また、銀鴨一羽取りて（兼ねて鳥屋内とやに置く）参進して葉柯ようかに附くとあり。これは銀製の鴨を余興まいに進まいらせたと見ゆ。上に述べた金作りの鶏

や、銀作りの猫も、かかる動物共進会の節用いられた事もあるう。  
 それを倉科長者の伝説などに田舎人は宝競べに郡へ登るなど言つ  
 たであらう。『男色大鑑』八の二に、峰の小ざらしてふ芝居若衆、  
 しゃむの鶏を集めて会を始めける、八尺四方に方屋を定め、これ  
 にも行司あつて、この勝負を正しけるに、よき見物ものなり。左  
 右に双なびし大鶏の名をきくに、鉄石丸、火花丸、川いばた韋だてん駝天、  
 しまのねじ助、八重のしやつら、磯松大風、伏見のりこん、中  
 の島無類、前の鬼丸、後の鬼丸（これは大和の前鬼後鬼より採つ  
 た名か）、天てん満まの力蔵、今日の命知らず、今宮の早鐘、脇見ずの  
 山桜、夢の黒船、髭はのんかい、神なる鳴かみの孫助、さざ波か金ね碓かり、  
 くないの竜田、今不二の山、京の地車、平野の岸崩し、寺島の

しだり柳、綿屋の喧嘩けんか母衣、座摩の前の首、白尾なし公平、このほか名鳥限りなく、その座にして強きを求めてあたら小判を何ほどか捨てけると出いづ。その頃までも丸の字を鶏の名に付けたが、また丸の字なしに侠客や喧嘩がかった名をも付け、今不二の山と岸崩しが上出英国のピークン山とビーチエン崖に偶然似ているも面白い。

吉田巖君説（『郷土研究』一卷十一号六七二頁）に、国造神が国土を創成するとき、鶏は土を踏み固め、せき鶴せきは尾で土を叩いて手伝った。そこで鶏は今も土を踏みしめて歩き、鶴は土を叩くように尾を打ち振るのだとアイヌ人は言い伝うと。鶏は昔はアイヌに飼われなかったから、天災地妖の前兆などの対象物として



は何らの迷信もきかぬ。星や、日、月、雲などについて種々の卜占法の口伝があるように、鳥類のある物たとえば鳥などについては特殊の口碑があつて、その啼なき音に吉凶の意味ある物と考えられて居るが、鶏のみはこの種の口伝を持たぬとあつて、あるアイヌ人が鶏の宵啼きや、牝鶏の時を作るを忌むを不審した由を記された。日本人は古く鶏を畜かい、殊に柳田氏が言われた通り、奥羽に鶏を崇拜した痕跡多きに、その直隣りのアイヌ人がかくまで鶏むとんじやくに無頓著むとんじやくだったは奇態だが、これすなわちアイヌ人が多く雑居した奥羽地方で、鶏を神異の物と怪しんで崇拜した理由であるまいか。西半球にはもと鶏がなかつたから、その伝説に鶏の事ま乏しきは言うを俟たず。

前に鶏足の事を説いた時に言い忘れたからここに述べるは、ピルマのカレン人の伝説に、昔神あり、水牛皮に宗旨と法律を書き付けてこの民を利せんとし一人に授く、その人これを小木上に留め流れを渡る。暫くありて帰り見れば犬その巻物を銜くわえて走る。これを追うと犬巻物を落す。その人拾いにゆく間に鶏来つて足で掻き散らし、字が読めなくなった。神書に触れたもの故とあつて、カレン人は鶏の足を尊べど、その身を食うを何とも思わぬ。戸の上また寢床の上に鶏足を置いて、土中と空中に棲む悪鬼シンナを辟さくと（一八五〇年シンガポール発行『印度群島および東亞雜誌』四卷八号四一五頁、ロー氏説）、支那では蒼そうけつ頰が鳥の足跡を見て文字を創はじめたというに、この民は神が書いた字を鶏が足で掻き

消したと説くのだ。

(大正十年三月、『太陽』二七ノ三)

## 4

前項に書いたほかにまだまだみろく弥勒と僭称した乱賊の記事がある。

『松屋筆記』六五に『二十二史劄記』さつぎ三十卷、元の順帝の至正十

一年、とこな韓山の童倡えて言う、天下大いに乱れ、弥勒仏下生すと、

こうわい江淮の愚民多くこれを信ず、果して寇賊蜂起し、ついに国亡ぶ

るに至る、しかるにこの謡は至正中より起るにあらざるなり、順

帝の至元三年、じよねい汝寧より獲るところの捧胡を献ず、弥勒仏小旗、

紫金印の量天尺あり、而して泰定帝の時、また先に息州の民趙ちよう

丑ちゆうし斯、郭菩薩等あり、謠言を倡え、弥勒仏まさに天下を有つ

べしという、有司以て聞ず、河南行省に命じてこれを鞫治きくちせしむ、

これ弥勒仏の謠すでに久しく民間に播まくなり、けだし乱の初めて

起る、その根株を抜かず、ついに蔓延して救うべからざるに至る、

皆法令緩弛の致すところなり云々。本朝にも弥勒の名を仮りて

衆を乱せし事歴史に見ゆとありて、頭書に『輟耕録』二十九に

も出いづとあるから取り出し読むと、果して至正十一年、執政脱々

が工部尚書賈魯かろを遣わし、民夫十五万と軍二万を役して黄河を決

せしめ、道民生を聊やすんぜず、河南の韓山童乱なを作し、弥勒仏の出世

を名となし、無頼の悪少を誘集し、香を焼たき、会えを結び、漸々滋じ

蔓まんして淮西の諸郡を陥れ、それより陳友諒・張士誠等の兵ついで尋で起り、元朝滅亡に及んだ次第を述べ居る。本朝にも弥勒の平等世界を唱えて衆を乱した事歴史に見ゆとは何を指すのかちよつと分らぬが、『甲斐国妙法寺記』に、永正三丙ひのえとら寅、この年春は売買去年冬よりもなお高直こうじきなり。秋作はことごとく吉よし、ただし春の詰よまりに秋吉よけれども、物も作らぬ者いよいよ明けし春までも貧なり。この年半ばの頃よりも年号替わるなり云々とありて、永正四丁卯ひのとう、弥勒二年丁卯と並べ掲ぐ。山崎美成よししげの書いた物にこの年号の考あつたと覚ゆれど今ちよつと見出さず。『一話一言』一六に、『会津旧事雑考』より承安元年辛卯かのとうを耶麻郡新宮の神器の銘に、弥勒元辛卯と記した由を引き、三河万歳みかわまんざいの唱歌に、

弥勒十年辰の歳、諸神の立ちたる御屋形と唄うも、いづれなき事にはあらしかし、とある。永正三丙寅と承安元辛卯、いづれも弥勒元年とするもその十年は乙亥きのといか庚子かのえねで辰の歳じやない。

『慶長見聞集』の発端に見えしは、今三浦の山里に年よりへたる知人あり、当年の春江戸見物とて来りぬ。愚老に逢いて語りけるは、さてさて目出たき御代かな、我ごとき土民までも安楽に栄え美々しき事どもを見きく事のありがたさよ、今が弥勒の世なるべしという。実げに実に土民のいい出せる詞ことばなれども、全く私言にあるべからずと記せるなど考え出すと、昔は本邦でも弥勒の平等無差別世界を冀こいねがう事深く、下層民にまで浸潤し、結構な豊年を祝い、もしくは難渋な荒歳を厭うことは、一度ならず私わたくしに弥勒と年号を

建てたらしく、例の足利氏の代に多く起つた徳政一揆などの徒が、支那朝鮮同様弥勒仏の名を仮つて乱を作せし事もあつたのだろう。二月十六日の『大毎』紙に、綾部の大本あやべ おおもとに五六七殿というがあるそうで、五六七をミロクと訓ませあつた。かつて故老より亀の甲は必ず十三片より成り、九と四と合せば十三故、鼈甲べつこうで作る櫛くしを九四といひ始めたと承つたが、江戸で唐櫛屋とうくしやを二十三屋と呼んだは十九四とくしの三数を和すれば二十三となるからという（『一話一言』八）。この格で五と六と七を合すと十八すなわち三と六の乗積ゆえ、弥勒の無差別世界を暗示せんため、弥勒の代りに十八、そのまた代りに五六七と書いたものでなからうか。

さて前に書いた通り、鶏足を号とした寺は東北に多く、また、

奥羽地方に荷渡りにわた権現ごんげん多く、また鷄足にわたり権現、鷄足明神と漢字を宛て、また、鷄鳥権現と書きある由（『郷土研究』二卷八号、尾芝氏説）、しかるに『真本細々要記』貞治じょうじ五年七月の条に、伏見鷄足寺見ゆれば畿内にもあつたのだ。蔵王権現は弥勒の化身と『義楚六帖』にいえば、これを尊拝する山伏輩がもつとも平等世界や鷄足崇拝を説き廻つただろう。

河内の道明寺中興住持の尼、覺かくじゆ寿は菅かん丞しょうじよう相の伯母で、

菅神左遷の時、当寺に行き終夜別れを惜しむ。暁に向い鷄啼きてかまびす喧し。菅神そこで吟じたもう和歌に「鳴けばこそ別れを急げ鳥の

ねの、聞えぬ里の暁もがな」（『和漢三才図会』七五）、これよりこの土師はじの里に鷄鳴かず、羽はばた敲たたきもせぬ由、『菅原すがわらでんじゆかが伝授



鑑<sup>み</sup>』に出で、天神様が嫌うとて今に鶏を飼わぬらしい（高木氏

『日本伝説集』二一九頁）。

一五三五年頃スアヴェニウスは、スコットランドで周り八マイルばかりまるで鶏鳴かぬ地を見た由（ハズリツト、一卷一三五頁）。「広益俗説弁」三八に、俗説にいわく、菅丞相御歌に「鳥もなく鐘も聞えぬ里もがな、ふたりぬる夜の隠れがにせむ」。これは太田道灌の『慕景集』鳥に寄する恋「世の中に鳥も聞えぬ里もがな、二人ぬる夜の隠れがにせむ」とあるを、菅原の詠と誤り伝えたのだとあつて「鳴けばこそ」の歌は『天満宮故実』等に出ると言つたが、『天満宮故実』という物、余見た事なく、確かな書籍目録にも見えぬ。想うに道灌の「世の中に」の詠を真似<sup>まね</sup>て後人

が「鳴けばこそ」の一首を偽作したのであろう。元禄時代の編て  
 ふ『当世小唄揃』には「鳥のねも鐘も聞えぬ里もがな、二人ぬる  
 夜の隠れがにせん」とある。「人を助くる身を持ちながら暁の鐘  
 つく」糞坊主とひと齊しく、鶏の無情を恨んだ歌はウンザリするほど  
 あつて、就なかんずく中著名なは、『伊勢物語』に、京の男陸奥の田舎  
 女に恋われ、さすがに哀れとや思いけん、往きて寝て、夜深く出  
 でにければ、女「夜も明けばきつ狐にはめけんくだかけ鶏の、まだきに鳴きて  
 せなをやりつる」。後世この心を「人の恋路を邪魔する鳥は犬に  
 食われて死ぬがよい」とドドく繰ったものじゃ。『和泉式部家集』  
 五、鶏の声にはかられて急ぎ出でてにくかりつれば殺しつとて羽  
 根に文を附けて賜われれば「いかゞとは我こそ思へ朝なく、なほ

聞せつる鳥を殺せば」、これは實際殺したのだ。劉宋の朝の読曲歌にも「打ち殺す長鳴き鶏、弾じ去る鳥うきゆう白うの鳥」。『遊仙窟』には「憎むべしびようじやく病び鵲じやく夜半人を驚かす、薄媚はくびの狂鶏三更曉を唱う」。呉の陸璣りくぎの『毛詩草木虫魚疏』下に、「鶴常に夜半に鳴く」。『淮南子』えなんじまたいう、「鶏はまさに旦あけんとするを知り、鶴は夜半を知る、その鳴高こうりよう亮、八、九里に聞ゆ、雌は声やや下る、今呉人園えんゆう園中および士大夫家の皆これを養う、鶏鳴く時また鳴く」と見ゆれば、鶏と等しく鶴も時を報ずるにや。それから例の「待つ宵ふけに更行く鐘の声聞けば、飽かぬ別れの鳥は物かは」に因ちなんで、『新增犬筑波』に、「今朝のお汁の鳥はものかは」「何処いずこにも飽かぬは鰈かれいなますの膾かにて」「これなる皿は誉ほめる人なし」

とは面白く作ったものだ。庾ゆけんご肩吾の冬曉の詩に、  
 へ隣鶏の声すで  
 に伝わり、愁人ついに眠らず。楊用脩の繼室黃氏夫に寄する詩  
 に、  
 へ相聞空しく刀環の約あり、何いっの日か金鶏夜郎に下らん、  
 李廓の鶏鳴曲に、  
 へ星稀に月没して五更に入る、  
 膠こうこう々角々鶏初  
 めて鳴く、征人馬を牽いて出でて門立つ、妾を辞して安西に向い  
 て行かんと欲す、再び鳴きて頸を引く簷えんとう頭の下、月中の角声馬  
 に上るを催す、わずかに地色を分ち第三鳴、旌せいはい旆紅塵こうじんすでに  
 城を出いづ、婦人城に上りて乱に手を招く、夫婿聞かず遙かに哭す  
 る声、長く恨む鶏鳴別時の苦、遣らず鶏棲窓戸に近きを。支那  
 にも鶏に寄せて閨情を叙のべたのが少なくない。余一切経を通覽せ  
 しも、男女が鶏のつれなさを恨んだインドの記事を一つも見なん

だ。欧州にも少ないらしい。日本に至つては逢うて別るる記述毎  
 に鶏が引き合いに出る。『男色大鑑』八に芝居若衆峰の小曝し闘  
 鶏を「三十七羽すぐりてこれを庭籠にわこに入れさせ、天あつぱれ晴、この鶏  
 に勝りしはあらじと自慢の夕より、憎からぬ人の尋ねたまひ、い  
 つよりはしめやかに床の内の首尾氣遣いしたまい、明方より前に  
 八やつの鐘ならば夢を惜しまじ、知らせよなど勝手の者に仰せつける  
 に、勤めながら誠を語る夜は明けやすく、長蠟燭の立つ事はやく、  
 鐘の撞つき出し氣の毒、太夫余の事に紛らわせども、大臣耳おとどを澄ま  
 し、八つ九つの争い、形付かぬ内に三十七羽の大鶏、声々に響き  
 渡れば、申さぬ事かと起ち別れて客は不断の忍び駕籠かごを急がせけ  
 る、名残なごりを惜しむに是非もなく、涙に明くるを俟まちかね、己おのれら

恋の邪魔をなすは由なしとて、一羽も残さず追ひ払いぬ。これな  
 どは更にわけの若衆の思い入れにはあらず、情を懸けし甲斐こそ  
 あれ」とは、西洋で石田を耕すに比べられ、『四季物語』に「妹  
 脊もせの道は云々、この一つのほかの色はただ盛りも久しからず、契  
 りの深かるべくもあらぬ事なるを、いい知らずもすける愛なき云  
 々、幼き心つからは何かは思わん。互いに色に染み、情にめでて  
 こそこの道迷いは重くも深くもあるべし。ただ何となきちごすがた児姿  
 をこそいえ心はただなおにこそ思わめ」とそし譏られた男子同性愛も、  
 事こと昂ことうずればいわゆるわけの若衆さえ、婦女同然の情緒を發揮して、  
 別れを恨んで多数高価の鶏を放つに至つたのだ。わが国でこの類  
 の最も古いらしい伝説は、神代ことしろぬしのみこと代主命なかつ小舟なかうで毎夜中

海を渡り、楫屋村なる美保津姫に通うに、鶏が曉を告ぐるを聞いて帰られた。一夜、鶏が誤つて夜半に鳴き、命、周章舟を出したが櫓を置き忘れ、抛なく手で水を掻いて帰る内、鰐に手を噬まれた。因つて命と姫を祀れる出雲の美保姫社辺で鶏を飼わず。参詣者は鶏卵を食えば罰が中るとして食わぬ（『郷土研究』一卷二号、清水兵三氏報）。

『秋斎間語』二に「尾州一の宮の神主、代々鶏卵を食せず云々、素すさのおのみこと 羹たけのこと 尊やまとたけるのみことの鳥の字を鳥に書きたる本を見しよりなり。熱田には筍を食わず、日ましま 本ましま 武ましま 尊ましまにて座す故となん云々。さいえば天下の神人はすべて紙は穢れたる事に使うまじきや。また、津島の神主氷室氏、絵えがくに膠にかわの入りたる墨を使わず、筆の毛は忌まざ

るにや」。もつともな言い分ながら鶏卵を食わぬには古く理由があつただろう。鶏がきぬぎぬの別れを急がして悪にくまるるほかに、早く鳴いて、鬼神や人の作業を中止せしめた多くの嘶はなしは別に出し置いたから御覧下さい。

仏経に見る鶏の輪廻りんねぼなし譚を少し出そう。仏が王舎城にあつた時、南方の壮士、力千夫せんぶに敵するあつて、この城に来るを影勝王が大將とす。五百賊を討つに独り進んで戦い百人を射、余りの四百人に向い、汝すすら前すんで無駄死にをするな、傷ついた者の矢を抜いて死ぬるか生きるかを見よと言うた。諸賊射られた輩の矢を抜くと皆死んだので、かかる弓術の達者にとても叶わぬと曉さとり、一同降参した。大將これをあわれを愍み、そこに新城を築き諸人を集め住ませ曠



野城と名づけた。城民規則を設け、婚礼の度たびごとにこの大将を馳走し、次に自分ら飲宴するとした。時に極めて貧しい者あつて、妻を娶るに大将を招待すべき資力なし。種々思案の末、酒肴の代りにわがいまだ触れざる新妻を大将の御慰みに供え、その後始めて自宅へ引き取つた。爾後、恒例となつて諸人妻を迎うるごとに大将に手折たおらせたとあるが、これは事の起源を説かためかかる嚙をこじ付けたので、拙文「千人切りの話」に論じた通り、一八八一年フライブルヒ・イム・ブライスガウ板、カール・シユミツト著『初婚夜権』等を参するに、インド、クルジスタン、アングマン島、カンボジャ、チャンパ、マラツカ、マリヤナ島、アフリカおよび南北米のある部に、もとよりかかる風習があつたので、

インドで西暦紀元頃ヴァチャ梵士作『愛天経』七篇二章は全く王者が臣民の妻娘を懐柔する方法を説く。その末段にいわく、アンドラの王は臣民の新婦を最初に賞しょうがん翫がんする権利あり。ヴァツアグルマ民の俗、大臣の妻、夜間、王に奉仕す。ヴァイダルブハ民は王に忠誠を表せんとて一月間その子婦を王の閨房に納いる。スラシユトラ民の妻は王の御意に随い、独りまた伴うてその内宮に詣いたるを常とすと。欧州には古ローマの諸帝、わが国の師直もろなお、秀吉と同じく（『塵塚物語』五、『常山紀談』細川忠興ただおき妻義死の条、山路愛山の『後編豊太閤』二九一頁参照）、毎度臣下の妻を招きてこれを濫したというから、中にはアンドラ王同様の事を行うたも少なからじ。降くだつて中世紀に及び、諸国の王侯に処女権あり。

人が新婦を迎うれば初めの一夜、また数夜、その領主に侍らしめねば夫の手に入らぬのだ。例せばスコットランドでは十一世紀に、マルコルム三世、この風を発せしが、仏国などでは股権とて十七世紀まで幾分存した。この名は君主が長靴穿つた一脚を新婦の臥どこ牀に入れ、手鎗を以て疲るるまで坐り込み、君主去るまで夫が新婦の寢室に入り得なんだから出た。夫この恥を免れんため税を払い、あるいは傭ようえき役に出で、甚だしきは暴動を起し、稀には「義経は母を」何とかの唄通りで特種の返報をした。仏国ブリヴ邑むらの若侍、その領主が自分の新婦に処女権を行うに乗じて、自らまた領主の艶妻を訪い、通夜してこれに領主の体格不似合の大男児を産ませた椿事ちんじあり。かかる事よりこの弊風ついに亡びた（一八一

九年板コラン・ド・ブランシーの『封建事彙』一卷一七三頁）。

仏国アミアンの僧正は領内の新婦にこの事を行うを例としたが、

新夫どもの苦情しきりなるより、十五世紀の初めに廃止したとい

うに、尾佐竹おさたけたけき猛君の来示に、今もメキシコで僧がこの権を振う

所ある由。『大英百科全書』十一板、十五卷五九三頁に、紀元三

九八年カルタゴの耶蘇徒に新婚の夜、かの事を差し控えよと制し

たが後には三夜まで引き伸ばした。さて、欧州封建時代の領主は

臣下の婚礼に罰金を課したから、この二事を混じて中古処女権て

ふ制法が定まりいたと信ずるに至つたのだとある。しかし上述通

り欧州外にもこの風行われた地多ければ、制法として定まりおら

ずとも、暴力これ貴んだ中古の初め、欧州にこの風行われたは疑

いを容れず。『後漢書』南蛮伝に交趾の西に人を噉う国あり云々、  
 妻を娶つて美なる時はその兄に譲る。今烏澹人おここれなり。阿呆を  
 烏澹という起りとか。明和八年板、増舎大梁の『当世傾城氣質』  
 四に、藤屋伊左衛門諸国で見た奇俗を述べる内に「振舞膳ふるまいぜんの後  
 我女房を客人と云々」これらは新婦と限らぬようだが、余ら幼き  
 頃まで紀州の一向宗の有難屋連ありがたや、厚く財を献じてお抱寝だきねと称し、  
 門跡の寢室近く妙齡の生娘きむすめを臥せさせもらい、以て光彩門戸もんこに  
 生ずと大悦びした。また、勝浦港では年頃に及んだ処女を老爺に  
 托して破素してもらい、米、酒、および桃紅色ふんどしの禪を礼に遣わし  
 た。『中陵漫録』十一にいわく、羽州米沢の荻村では媒人が女の  
 方に行きてその女を受け取り、わが家に置く事三夜にして、餅を

円く作つて百八個、媒が負うて女を連れ行き婚礼を調うと。ローマの議院でシーザーに一切ローマ婦人と親しむ権力を附くべきや否やを真面目まじめに論じた例あり。スコットランドでは中古牛を以て処女権を償うに、女の門地の高下に従うて相場異なり、民の娘は二牛、士の娘は三牛、太夫の娘は十二牛などだ。イングラントはこれに異なり民の娘のみこの恥を受けた（ブラットンの『ノート・ブック』卷二六）。藤沢君の『伝説』信濃卷に百姓の貢米ぐまいを責められて果す事が出来ない、領主は百姓の家族の内より、妻なり、娘なりかまわず、貢米賃というて連れ来つて慰んだ由見える。これも苛税をはたす奇抜な法じや。

処女権の話に夢中になつてツイ失礼しました。さて、曠野城の

大将の恒例として、城内の人が新婦を娶るごとに処女権を振り廻す。ある時一女子あつて人に嫁せんとするに臨み、そもそもこの城の人々こそ怪けしからね、自分妻を迎うるとはまず他人の自由にせしむ、何とかしてこの事を絶ちたいと左思右考の末、白昼衆人中に裸で立ち小便した。立ち小便については別に諸方の例を挙げ置いたが（立小便と蹲踞そんこ小便）、その後見出でたは、慶安元年板『千句独吟之俳諧』に「佐保姫ごぜや前すゑて立つ」、「余寒にはしばしはしゝを恠こらへかね」、まずこれが日本で女人立ち尿いばりの最古の文献だ。ずっと前に源俊頼としよりの『散木奇歌集』さんぼくきかしゅう九に、内わたりかたちに夜更けてあるきけるに、形よしといわれける人の打ち解けてしとしけるを聞きて咳しわぶきをしたりければ恥じて入りにけり、

またの日遣わしける「形こそ人にすぐれめ何となくしとする事も  
をかしかりけり」。打ち解けて人に聞かせるほど垂れ流したのだ  
から、これは宮女立ち小便の証拠らしくもある。それはさて置き、  
曠野城の嫁入り前の女子が昼間稠人ちゆうじん中で裸で立ち尿をした空  
前の手際に、仰天して一同これを咎めると、女平気で答うらく、  
この国民はすべて意気地なしで女同然だ。而して將軍独りが男子  
で婚前の諸女を弄ぶもてあそ。われら女人は將軍の前でこそ裸で小便がな  
るものか、だが汝ら女同前の輩の前で立ち小便しても何の恥かあ  
るべきと。衆人これを聴いて大いに慙はじ入り、会飲の後のち將軍を取  
り囲みその舎を焼かんとす。いわく婦女嫁入り前に必ずすべて汝  
に辱しめらるるは堪忍かんにんならぬ故、汝を焼き殺すべしと。



將軍それは無体だ、我辞退したのを汝ら強いて勧めたではないかと、諸人聴き入れず何に致せ焼けて焼けて辛抱が仕切れぬからと、いう事で焼き殺しました。ところがこの將軍殺さるる三日前に、仏の大弟子目連もくれんと、舍利弗しやりほつ、およびその五百弟子を供養した功德で大力鬼神となり、大疫気を放ち無数の人を殺す。城民弱り入り、林中に行きて懺謝し、毎日一人を送つて彼に食わせる事に定め、一同鬪くじびき引して当つた者の門上に標札を掲げ、家主も男女あたも中つたら最後食われに往かしめた。かく次第してついに須拔すばつだ陀羅長者たちようじゃの男児が食わるる番に中つた。長者何とも情けない。如来にょらい我子を救えと念ずると、仏すなわち来て鬼神殿中に坐つた。鬼神、仏に去れというとな仏出で去る。鬼、宮に入れば、仏、また

還り、入る事三度して四度目に仏出でず、鬼神怒つて出でずんば  
汝の脚を捉え、恒河裏ごうがに擲なげ込なむべしというに、仏いわく、梵天  
様でも天魔でも我を擲なげうつ力はないと。鬼神ちとへコタレ気味で四  
つの問いを掛けた。誰か能く駛はやい流れを渡る、誰か能く大海を渡  
る、誰か能く諸苦を捨つる、誰か能く清浄を得るぞと。仏それは  
御茶の子だ、信能く駛しりゆう流を渡り、放逸ならぬ者能く大海を渡り、  
精進能く苦を抜き、智慧能く清浄を得と答うると、鬼神さもあろ  
う、それもそうよのうと感心して仏弟子となり、手に長者の男児  
を捉えて仏の鉢中に入れた、曠野鬼神の手から救われ返った故こ  
の児を曠野手と名づけ王となる。仏と問答してたちまち悟り、病  
死して無熱天に生まれた。仏いわく、過去に一城の王好んで肉を

食らう。時に王に求むる所ある者、鶏を献じ、王これを厨ちゆうじん人に渡し汁に焚たかしめた。かの鶏を献じた人、もとより慈心あり、鶏の罪なくして殺さるるを哀しみ、厨人よりこれを償い放ち、この王の悪業願わくは報いを受くるなかれ、我來世厄難に遭あう時、えらい大師が來つて救いたまえと念じた。その鶏を献じた者が今の曠野手王に生まれ、昔の願力に由つてこの厄難を免れたと。この話自身は余りゾツとせぬ（『根本説一切有部毘那耶こんぽんせついつさいいうぶびなや』四七、『雜寶藏經』七參酌）。明の永樂十五年に成つた『神僧伝』九にいわく、嘉州かの僧、常羅漢は異人で、好んで人に勧めて羅漢齋を設けしめたからこの名を得、楊氏の婆、鶏を好み食ひ、幾千万殺したか知れず、死後家人が道士を招いて醮しやうさい祭する所へこの僧

来り、婆の子に向い、われ汝のために懺悔してやろうという。楊家甚だ喜び、延ひき入れると、僧その僕に街東第幾家に往つて、花雌鷄一隻を買い来らしめ、殺し煮て肉を折きり、盤に満て靈前に分置し、その余りを食い、挨拶なしに去つた。この夕、鷄を売つた家と楊氏とことごとく夢みたは、楊婆来り謝して、存ぞんじよう生時の罪業に責められ、鷄と生まれ変り苦しむところを、常羅漢懺謝の賜ものに頼よりて解脱したと言うと、これより郡人仏事をなすごとにこの僧が来れば冥助を得るとしたと。

坊主が自分の好く物を鱈たらふく腹頬張つて得脱させやつたと称えた例は、本邦またこれある。『宇治拾遺』に永超僧そうず都は魚なければ食事せず、在京久しき間魚食わず、弱つて南都に下る途上、その

弟子魚を乞い得て薦<sup>すす</sup>めた。魚の主、後に鬼がその辺の諸家に印し  
 付くるに我家のみ付けず、鬼に問うとかの僧都に魚を奉った故印  
 し除くというと夢みた。その年この村疫病で人多く死んだが、こ  
 の家のみ免れ、僧都の許<sup>もと</sup>へ参り告げると被<sup>かむりもの</sup>物<sup>ひとつかさね</sup>一重<sup>はまぐり</sup>くれた  
 とある。『古今著聞集』に、伊勢の海浜で採れた蛤を東大寺の上  
 人が買つて放ちやると、その夜の夢に蛤多く集まりて、大神宮の  
 前に進<sup>まい</sup>りて得脱するはずだったに、入らぬ世話して苦を重ねしめ  
 られたと歎いたと記す。夢に立会人がないからアテにならず、ま  
 ずは自分が食いたさにこんな事を触れ散らしたのだろう。それよ  
 りも豪いのはインドで、女人その身を僧に施すを功德と信じた。  
 『解脱戒本経』に、もし比丘<sup>びく</sup>、女人の前において自ら身を讃め、

姉妹我ら戒を持し善く梵行を修す、まさに姪慾を以て供養すべし、  
 この法は供養最も第一と言わば、僧伽婆尸沙罪そうがばししやさいたりという。そ  
 の風を伝えたものか、『西域見聞録』五にズルガル部落を記して、  
 へ最も喇嘛ラマを重んず云々、遙かにこれを見ればすなわち冠を免ぬぎて  
 叩こうちよ著す、喇嘛手にてその頂を摩し、すなわち勝れてこれを拊舞べんぶ  
 す、女を生めば美麗なるを択びてこれを喇嘛に進むるに至る、少  
 婦疾病あるに遇えば、すなわち喇嘛と歇けつしゆく宿ゆくせんことを求む、  
 年を経月を累ね、而して父母本夫と忻慰きんいす、もしあるいは病危う  
 ければ本夫をして領出せしめ、ただその婦の薄福を歎ずるのみ。前  
 述一向宗徒が門跡様をありがたがったごとし。ジュボアの『印  
 度の風俗習慣および礼儀』二卷六〇九頁等に、梵土が神の妻にす

るとて美婦を望むに、親や夫が悦んでこれを奉り、梵士の慰み物としてその寺に納<sup>い</sup>れる由を記す。

男女が逢瀬の短きを恨んで鶏を殺す和漢の例を上<sup>に</sup>挙げたが、それと打<sup>つ</sup>て異<sup>か</sup>つた理由から鶏を殺す話がイタリアにある。貧しい少女が独り野に遊んで、ラムピオン（ホタルブクロの一種で根が食える）を抜くと、階段が見える。歩み下ると精魅の宮殿に到り、精魅らかの少女を愛する事限りなし。それより母の許へ帰らんと望むに、許され帰る。その後、夜々形は見えずに噪<sup>さわ</sup>ぐ者あるので、母に告げると、蠟燭を点<sup>とも</sup>して見出せという。次の夜、蠟燭点して見ると、玉のごとき美少年胸に鏡を著<sup>つ</sup>けたるが眠り居る。その次の夜もかくして見ると、誤つてその鏡に蠟を落し、少年

たちまち覺めて汝はここを去らざるべからずと歎き叫んだ。少女すなわち去らんとする時、精魅現われて糸の毬まりを与え、最も高い山頂に上つてこの毬を下し、小手巻きの延のび行く方へ随い行けと教え、その通りにして一城下に達するに、王子失せたという事で城民皆喪服しいた。たまたま母后窓よりこの女を見、呼び入れた。その後この女愛らしい男児を生むと、毎夜靴を作る男ありて「眠れ眠れわが子、汝をわが子と知つた日にや、汝の母は金の揺ゆり籃かごと金の著物きもので汝を大事に育つだろ、眠れ眠れわが子」と唄うた。女、母后に告げたはこの男こそこのほど姿を晦くらましたという王子で、王子に見知られずに日が出るまで王宮に還らぬはずだと、母后すなわち城下の鷄を殺し尽くし、一切の窓を黒絹ろで覆い、その



上に金剛石を散らし掛けしめ、日出るも見知らずまだ夜中と思わせた。かくて王子は少女と婚し、目出たく添い遂げたそうだ。

イタリア人ジオヴァンニ・バッチスタ・バシレの『イル・ペクタメロネ』の四巻一譚に、ミネカニエロ翁雄鶏を飼う。金入用に及び、これを術士二人に売る。彼ら鶏を持ち去るとて、この鶏の体内に石あり。それを指環に嵌めて佩ぶれば、欲しいと思う物ごとくとく得べしと語る。ミネカニエロこれを聞いてその鶏を盗み、殺して石を取り、青年に若返り、金銀莊嚴の宮殿に住む。術士化け来つて、その指環を銜り取ると、ミネカニエロまた老人となり、指環を取り戻さんと鼠が住む深穴国に至る。鼠ども術士の指を咬んで環をミ翁に復す。ミ翁また若返り、二術士を二驢に化し、自

らその一に騎のり、後山のちより投下す。今一の驢しに豕脂しを負わせ、報酬として鼠どもに贈るとある。鶏石（ラテン名ラピルス・アレクトリウス）は鶏の体内にある小石で、豆ほど大きく、水晶の質でこれを佩ぶれば妊婦よろに宜しく、また人をして勇ならしむ。クロトナのミロンは鶏石のおかげで大勇士となった由。一六四八年ボニア板、アルドロヴァンズスの『ムセウム・メタリクム』四卷五八章に、この石の記載あるが諸説一定せず、蚕そらまめ豆状とも三角形ともいう。佩ぶれば妊婦に宜しという石どもについては、余未刊の著『燕石考』に詳述したが、その一部分を「孕はらみいし石の事」と題して出し置いた。

欧州で中古盛んに読まれた教訓書『ゲスタ・ロマノルム』一三

九譚に、アレキササンダー王大軍を率いある城を囲むに、將士多く  
きざ創を蒙らずこうむに死す。王怪しんで學者を集め問うに、皆いわく、こ  
 れ驚くに足らず。この城壁上に一のバシリスクあり、この物にら睨め  
 ば疫毒あつて兵士を殺すと答う。王どうしてこれを防ぐべきと尋  
 ねると、王の軍勢と彼の居る壁との間の高い所に鏡を立てよ。バ  
 シリスクの眼力鏡より反射して彼自身を殺すはずという。由つて  
 かくしてこれを平らげたと見ゆ。バシリスク一名コツカトリセは、  
 蛇ひきまた蟾蜍が雄鶏が産んだ卵を伏せかえ孵して生じ、蛇形で翼と脚あ  
 り、鶏冠いただを戴くとも、八足または十二足を具え、かぎ鈎ごとく曲つた  
くちばし嘴ありとも、また単に白点を頂にせる蛇王だともいう。雄鶏が卵  
 を生む例はたまたまあつて余も一つ持ち居る。つまり蛇や蟾蜍の

毒氣を雄鶏の生んだ卵が感受して、この大毒物を成すと信じたので、やや似た例は支那説に雉と蛇が交わりておおはまぐり蜃を生む。蛇に似て大きく、腰以下の鱗うろこことごとく逆生す。能く氣を吐いて楼台を成す。高鳥、飛び疲れ、就ついて息やすみに来るを吸い食う。いわゆる蜃しんろう楼だという。一説に正月に、蛇、雉と交わり生んだ卵が雷に逢うと、数丈深く土に入つて蛇形となり、二、三百年経て能く飛び昇る。卵、土に入らずば、ただ雉となると（『淵鑑類函』四三八、『本草綱目』四三）、サー・トマス・ブラウン説に、古エジプトの俗信に、桃花鳥とぎは蛇を常食とするため、時々卵に異状を起し、蛇状の子を生む。因つて土人は力つとめてその卵を破り、また卵を伏せるを許さずと。ヒエロム尊者説に、これは古エジプト人が崇拜

した桃花鳥でなく、やや悪性の黒桃花鳥だと。

さて、バシリスクが諸動物および人を睨めば、その毒に中つて死せざる者なく、諸植物もことごとく凋しほみ枯る。ただ雄鶏を畏おそれその声を聞けば、たちまち死す。故にこの物棲むてふ地を旅する者、必ず雄鶏を携えた。鼬いたちと芸香るうだもまたその害を受けず。鼬これと闘うて咬まれたら芸香を以てその毒を治し、また闘うてこれを殪たおす。古人これを獵とつた唯一の法は、每人鏡を持ちて立ち向うに、バシリスクの眼毒が鏡のためにその身に返り、自業自得でやにわに斃たおれたのだ。一説にこの物まず人を睨めば、人死すれど、人がまずこの物を見れば害を受けずと。さればドライデンの詩にも

「禍難はコツカトリセの眼に異ならず、禍難まず見れば人死に、

人まず見れば禍難亡ぶ」とよんだ（ブラウンの『俗説弁惑』ポンス文庫本一卷七章および註。『大英百科全書』十一板六卷六二二頁。ハズリット『諸信および俚俗』一卷一三二頁）。一八七〇年板、スコツフアーンの、『科学俚伝落葉集』三四二頁已下に、バシリスク譚は随分古く、『聖書』既にその前を記し、ギリシア・ローマの人々はこれを蛇中の王で、一たび嘯<sup>うそふ</sup>けば諸蛇<sup>は</sup>這い去るというた。中世に及んで多少鶏に似たものとなりしが、なお蛇王の質を失わで冠を戴くとされた。最後には劇毒ある蟾<sup>ひき</sup>蜥の一種と変った。初めはアフリカの炎天下に棲<sup>す</sup>んで他の諸動物を睨み殺し、淋しき沙漠を独占すといわれたが、後には、井や、鉞穴や、墓下におり、たまたま入り来る人畜を睨み殪すと信ぜられた。すべて

人間は全くの啞<sup>うそ</sup>はなく、インドのモンネース獸は帽蛇<sup>コブラ</sup>と闘うに、ある草を以てその毒を制し、これを殺すという。それから鼪<sup>る</sup>が芸香<sup>うだ</sup>を以てバシリスクを平らげるといい出したのだ。また深い穴に毎<sup>いっ</sup>も毒ガス充<sup>み</sup>ちいて入り来る人を殺す。それを不思議がる余り、バシリスクの所為と信じたのだと説いたは道理ありというべし。

一八六五年板、シーフィールドの『夢の文献および奇事』二卷附録夢占字典にいわく、女がバシリスクを産むと男が夢みればその男に不吉だが、女がかかる夢を見れば大吉で、その女富み榮え衆人に愛され<sup>な</sup>為すと成<sup>な</sup>就<sup>な</sup>せざるなしと。

十六世紀のバイエルン人、ウルリツヒ・シュミットの『ラプラタ征服記』のドミンゲズの英訳四三頁に当時のドイツ人信じたは、

鱷わにの息人いきに掛かれば人必ず死す。また、鱷、井中にあるを殺すに  
 は、鏡を示して自らその顔の瘖どうあく悪なるに懼おそれ死にせしむるほか  
 の手なしと。されど我自ら三千以上の鱷を食いて、少しも害なか  
 ったと述ぶ。これはコツカトリセと鱷を混じたようだが、本もとコツ  
 カトリセなる語はクロコジル（鱷）と同源より生じ、後コク（雄  
 鶏）と音近きより混じて、雄鶏の卵より生まるる怪物とされたの  
 だから（ウエブストルの大字書、コツカトリセの条）、シユミツ  
 トの見解かえって正し、熊楠由おもつて惟おもうに、バシリスクが自分の  
 影を見て死する語は、ものがたり鱷の顔至おもつて醜おもきより生じたのであろう。  
 ジエームス・ローの『回教伝説』に、帝たいしやく 釈しやくの天宮に住む天人、  
 名はノルテオクが天帝の園に花を採る若い天女に非望いだを懐いた罰



として、天帝を拝みに来る諸天神の足を浄める役にされたが、追々諸神の気に入つてついに誰でも指さして殺す力を得た。それからちゆうものは、少しく癩しやくさわに触る者あればすなわち指さして殺すので、天帝すこぶる逆鱗あり、ヴィシユニユの前身フラ・ナライ（那羅延）に勅して彼を誅ちゆうせしむと来た。ナライ小碓皇子おうすおうじの故智を倣ならい、花恥なずかしき美女に化けて往くと、ノンテオクたちまち惚ほれて思いのありたけ搔かき口説くどく。あなたは舞の上手と聞く、一さし舞つて見せられた上の事と、特種の舞を所望した。その舞を演ずるに舞人しばしば食指で自分を指さす定めだが、ノンテオクはナライの色に迷うて身を忘れ、舞を始めて自ら指さすや否や、やにわに死んだが、その靈地に墮おちて夜叉やしやとなり、それから転生

してランカ島の十頭鬼王となった（大正九年のこと別項「猴の話」）。勢力強大にして天威を怖れず、また天上に昇つて天女を犯さんと望み、押し強くも帝釈宮の門まで往つたが堅く闔とぎされてヤモリが一疋番しおり、この金剛石門は秘密の呪言で閉じられるから入る事は叶かなわぬと語る。鬼王あるいは諛へつらい、あるいは脅してとうとうヤモリから秘を聞き、一度唱えると天門たちまち大いに開け鬼王帝釈に化けて宮中に入る。その時、帝釈、天帝に謁せんとカイラス天山に趣く、留守の天女ども、鬼王が化けたと知らず、帝釈帰つたと思うて至誠奉仕し、鬼王歡を尽くして地に還る。真の帝釈、宮に帰つて窓より鬼王が望みを果して地に還れるを見、大いに怒つてヤモリに向い、今後一定時に小さい緑色の虫汝の体

に入り、心肝二臓を啖くらうぞと言うたので、ヤモリはいつもさような苦しみを受くる事となつた。かくて帝釈は、天女どもを鬼王に犯されたと思うと焼けてならず、天帝に訴える。そこで天帝、帝釈の魂を二分し、一を天上に留め、他の一を地に下して、羅摩と生まれて、ランカを攻めて鬼王を誅せしめたとあるが、これはラーマ王物語を回教徒が聞き誤つた一異伝で、果してこの通りだつたら、羅摩は前生帝釈たりし時、妃妾を鬼王に犯され、その敵かたき討うちに人界に生まれて、またその後シタを鬼王に奪われ、色事上返り討ちに逢つたヘゲタレ漢たるを免れぬ。件くだんのヤモリはその鳴き声に因つてインドでトケー、インドシナでトツケと呼ぶる。わが邦で蜥蜴をトカゲというに偶然似て居る。また支那でヤモリ

を守宮というは、件の『回教伝説』にヤモリ帝釈宮門を守るとい  
 うに符合する。この属の物は多く門や壁を這うからどこでも似た  
 名を付けるのじゃ。それに張華が、蜥蜴、あるいはえんてい 蛭と名づ  
 く。器を以て養うに朱砂を以てすれば体ことごとく赤し、食うと  
 ころ七斤に満ちて、始め擣くこと万杵しよにして女の支体しよに点ずれば、  
 終年滅せず、ただ房室の事あればすなわち滅す（宮女を守る）。  
 故に守宮と号す。伝えいう東方朔、漢の武帝に語り、これを試む  
 るに驗あり（『博物志』四）といえるは、蚤はやく守宮の名あるにつ  
 いて、かかる解釈を捏造ねつぞうしたのだ。

『夫木抄』に「ぬぐ沓くつの重なる上に重なるはるもりの印しかひや  
 なからん」。『俊頼口伝集』下に「忘るなよ田長たおさに付きし虫の色

ののきなば人の如何いかに答へん」「ぬぐ沓の重なる事の重なれば井守の印し今はあらしな」「のかぬとも我塗り替へん唐もろこし土の井守も守る限りこそあれ」中略、脱ぐ沓の重なると読めるは女の密ひそかに男の辺ほとりに寄る時ははきたる沓を脱げば、自ずから重なりて脱ぎ置かるるなりというた。この最後の歌はかつて（別項「蛇の話」の初項）論じた姪婦の体に、驢や、羊や、馬や、蓮花を画き置きしを、姦夫が幹事後描き替えた笑談と同意だ。右の歌どもはヤモリと井守を取り違えおれど、全く唐土の伝説を詠んだものだ。

さて、『回教伝説』にノルテオクが指させば人を殺し得るその指で自分を指さして死んだというのが、バシリスク自分の影に殺さる譚に酷似する。も一つこれに似たのは、古ギリシアのメズサ

の話で、そもそも醜女怪ステノ、エウリアレ、メズサの三姉妹をゴルゴネスと併称す。おそるべし可怖、また高吼の義という。翼生えた若い極醜女で、髪も帯も、蛇で、顔円く、鼻扁ひらたく、出歯大きく、頭を揚げ、舌を垂れ振るう。あるいはいう、金の翼、真鍮の爪、猪の牙ありと。余り怖ろしい顔故これを見る人即座に石となる。西大洋の最も遠き浜で、夜の国に近い所に住むとも、リヴィアすなわち北アフリカに居るともいわれた。一説にメズサもと美麗な室女だったが、海神ポセイドンとアテナ女神の堂内で姪し、洗けがした罰でその髪を蛇にされたと、ゴルゴネス三姉妹の同胞になおグライアイ（灰色髪女）三姉妹あり、髪が灰色になった老女で、ただ一つの歯とただ一つの眼を共有し、用ある時は相互譲り使った。

この三姉妹リビアの極端、日も月も見えぬ地に棲み、常にゴルゴネス三姉妹を護った。初めアルゴスの勇士ペルセウス、その母ダナエの腹にあつた時、神告げたは、この子生まるれば必ずその母の父アクリシウスを殺さんと、アクリシウスすなわち母子を木箱に納れ、海に投げたが、セリフス島に漂到して、漁師ジクツスの網に罹り、救われ、懇に養わる。ジクツスの弟ポリデクテス、この島の王たり。ダナエを一度瞥見してより、花の色はここにこそあれ、願わくは鄒子が律を吹いて、幽谷陽春を発せんと、雨夜風日熱心やまず、しかるにどうもダナエを靡けるにはその子が邪魔になるから、宴席でペルセウスを激して、王のためには何なりともすべし、怖るべき女怪メズサの首でも取り来るを辞せずと誓わ

しめたので、ペルセウスいよいよこの冒険事業を成し遂げんと出立したとあつて、この時ペルセウスは既に小児でなく、立派な青年勇士となり居る。さように久しい間王がダナエを口説き廻つたとも思われず。惟うに『八犬伝』の大江親兵衛同様の神護で、ペルセウスは一足飛びに大きく成長したでなあるう。女神アテナ、かつてメズサがかく醜くならぬ内、己れと艷容を争いし事あるに快からず、因つてメズサの像をペルセウスに示し、その姉妹を打ちやり、単にメズサのみ殺せと教う。それよりペルセウス灰色髪女を訪い、そのただ一つある齒と眼を奪い、迫つて三醜女怪方への道を聞き取り、またつばさ翅ある草履と、魔法袋と冥界王ハデースの兜かぶとを得、これをかぶ冒ると自分全体が他人に見えなくなる。そこへへ



ルメス神が鎌状の鋭刀をくれに來た。これらの道具で身を固めて大洋浜に飛び行くと、女怪ども睡りいた。女性に立ち向うて睨まると石になるから大いに困る所へ、アテナ女神現われ、その楯の鏡に映った女怪の影を顧み見ると同時に、女神の手でペルセウスの刀持った手を持ち添え、見事にメズサをくびは刎ねた。死んだ首を見ても石になるから、一切見ずに魔法袋へ投げ込み、翹ある草履で飛び還るを、残る二女怪追えどもいかでか及ばん。メズサの首はアテナに渡り、その楯には嵌め置かる。後アテナ、勇士ヘラクレスにメズサの前髪を与う。テゲアの地、敵に攻められた時、その王女ステロペ、ヘラクレスのおしえ訓により、自ら後ろ向いてメズサの前髪を敵に向つて城壁上に三度さし上げると、敵極めて怖れ、こと

ごとく潰走したという。前髪さえかくのごとくだから、よほど怖ろしい顔と見える。かくてギリシア人は醜女怪の首を甲冑の前立ととし、楯や胸当てに付け、また門壁の飾りとし、魔除けとしゴルゴネイオン（ゴルゴン頭）と称えた。惟うにバシリスク自影に殺さるる話に、この醜女怪説より融通された部分が多かろう。バシリスクの古い図は只今ちよつと間に合わぬ故、ここに現時バシリスクで学者間に通っている爬虫の図を出す（第一図）。これは伝説のバシリスクと全く別物で無害の大蜥蜴、長さ三フィートに達し、その色緑と褐で<sup>くろ</sup>黝き横条あり。背と尾に長き<sup>ひれ</sup>鰭あり。雄は頭に赤い冠を戴く。冠も鰭も随意に起伏す。その状畏るべく、その色彩甚だ美し、樹上に棲んで植物のみ食う。驚けば水に入りて能

く泳ぐ、メキシコとガチマラ西岸熱地の河岸に多し。その形、よく伝説のバシリスクに似る故、セバ始めてこれを記載し、バシリスク、また飛竜と名づけた。けだしこの人その起伏する長鱗を以て飛び翔<sup>か</sup>ける事、世に伝うるバシリスク、また竜のごとくだろうと察したのだ。バシリスクはギリシア語バシレウス（王）より出た名で、冠を戴いた体がいかに爬虫類の王者を想わせる（スミスの『希羅人伝神誌字彙』。サイツフェルトの『古典字彙』。『大英百科全書』それぞれの条。ウツトの『博物図譜』。ポーンズ文庫本ブラウンの『俗説弁惑』バシリスクの条）。

（大正十年五月、『太陽』二七ノ五）

第1図 バシリスクス・アメリカヌス

## 5

鶏を妖怪とする譚も少なからぬ。かつて『国華』に出た地獄の絵に、全身火燃え立ち居る大きな鶏が、猛勢に翅を鼓して罪人を焼き碎く怖ろしい所があつた。これは鶏地獄でその委細は『起世因本経』三に出<sup>い</sup>づ。英国デヴォンシャーの一僧、魔法に精<sup>くわ</sup>しきが、留守中、その一僕、その室に入つて机上に開いた一巻を半頁足らず読む内、天暗く暴風至り戸を吹き開けて、黒色の母鶏が雛を伴れて入り来り、初め尋常の大ききさだったが、ようやく増して母鶏は牛大となる。僧は堂で説法しいたが、内に急用生じたとして罷<sup>や</sup>め



帰ると、鶏の高き天井に届き居る。僧用意の米袋を投げ、雛競い拾う間に禁呪まじないを誦してその妖を止めた（ハズリツト、一卷三一三頁）、アフリカまた妖鶏談あつて、一六八二年コンゴに行つたメロラ師の紀行に、国王死後二人あつて相続を争う、一人名はシマンタムバ、この者ソグノ伯が新王擁立の力あるを以て、請うてその女を娶りめと、伯佯いっわつてこれを許し、娘と王冠を送るを迎えた途中で掩殺えんさつさる。シマンタムバの弟軍を起し、ソグノ伯領の大部分を取り、伯これを恢復せんとして大兵を率い敵の都へ打ち入るに、住民皆逃げて抗する者なし。伯の軍勢空腹を医かすするため飲食を掠むる内、常より大きな雄鶏、一脚に大鉄環を貫けるを見、これは魔物故食わぬがよいと賢人の言に従わず、打ち寄せて殺し、裂き

煮て食いに掛かると、ほとんど溶けいた鶏肉片が動き出し、合併して本の鶏となり、壁に飛び上ると新羽一斉に生え、更に樹に上つて三度翼を鼓し怖ろしい声で鳴いて形見えずなつた。さてこそ魔物と一同震慄した。シマンタムバ常に一大鶏を畜かい、その鳴く声と時刻を考え、事ごとに成敗を知つたと聞くが、それも無効と見えてソグノ伯あやむに給き殺された。今度の妖鶏はその鶏であろうかとある（ピンカートンの『海陸紀行全集』一六卷二三八頁）。

支那でも雲南の光明井に唐の大歴間、三角牛と四角羊と鼎足鶏あち見われ、井中火ありて天に燭しよくす。南詔以て妖となし、これを塞ふさがしむ。今風雲雷雨壇をその上に建つ（『大清一統志』三二二）。誠はなしに以て面妖な談だが、鶏に縁ある日の中に三足の鳥ありてふ旧

説から訛出したであろう。こんな化物揃いの嘯しは日本にもあつて、一休和尚讚州旅行の節、松林中に古寺あつて僧三日と住せず、化物出ると聞き、自ら望んで往き宿る。夜五更になれば変化出て踊り狂う。一番の奴の唄に「東野のぼずは糸しい事や、いつを楽とも思いもせいで、背骨は損し、足打ち折れて、ついには野辺の土となるく」、次の奴は「西竹林のけい三ぞくは、ある甲斐もなきかたわに生まれ、人の情けを得蒙らで、竹の林に独りぬるく」、三番目の物は「南池の鯉魚は冷たい身やな、水を家とも食ともすれば、いつもぬれくによくしとく」と唄う。一休一々その本性を暁り、明旦土人を呼び集め、東の野に馬の頭顱、西の藪中に三足の鶏、南の池に鯉あるべしとて探らせると果して



あり。これを葬り読経どきようして怪全く絶えたという（『一休諸国物語』四）。紀州で老人の伝うるは、何国と知れず住職を入れると一夜になくなる寺あり。ある時村へ穢きたない貧僧来るをこの寺へ泊まらせる。平気で読経し居ると、丑うし三つ頃、表の戸を敲たたきデンドンコロリ様はお内にかという者あり。中より誰ぞと問う声に応じ、東山の馬骨と答え、今晚は至極好さかない肴あるそうで結構でござると挨拶して通る。次は南水のきぎよ、西竹林の三けいちようと名乗りて入り来り、三怪揃うて僧に飛び掛かるを、少しも動ぜず経を讀んで引導を渡すと化物消え失せる。翌朝村人僧の教えのままに、馬頭と金魚、および三足鶏の屍を見出し、また寺の乾いぬいの隅すみの柱上より槌つちの子を取り下ろす。この槌の子がもつとも悪い奴で、他の

諸怪を呼んだのだ。槌の子を乾の隅に置くと怪をなすという。

『曾呂利物語』四には伊予の出石いすしの山寺で足利の僧が妖怪を鎮め

たとし、主怪をえんひよう坊、客怪をこんかのこねん、けんやの

ぼとう、そんけいが三足、ごんざんのきゆうぼくとす。円瓢坊は

円い瓢ひょうたん筆、客怪は坤河こんがなまずの鯰、乾野の馬頭、辰巳たつみの方の三足の

蛙、良山ごんざんの朽木とその名を解いて本性を知り、ことごとく棒で

打ち砕いて妖怪を絶ち、かの僧その寺を中興すと載す。漢の焦延

寿の『易林』に異鷄そんと為すとあれば、そんけいは異鷄そんけいだ、圭けいの

字音に拠よつて蛙をケイと読み損じて、異たつみの方の三足の蛙と誤伝し

たのである。

熊野地方の伝説に、那智の妖怪一ツタタラは毎いっも寺僧を取り食

う。刑部左衛門これを討つ時、この怪鐘を頭に冒り戦う故矢中らあたず、わずかに一筋を余す。刑部左衛門最早矢尽きたりというて弓を抛り出すと、鐘を脱ぎ捨て飛び懸るを残る一筋で射いたお殪した。この妖怪毎も山茶の木製の槌と、三足の鶏を使うたと。槌と鶏と怪をな為す事、上述デデンデンコロリの話にもあり、山茶の木の槌は化ける、また家に置けば病人絶えずとて熊野に今も忌む所あり、拙妻のそぞくうけがわ鹿族請川むりだの須川甚助てふ豪家、昔八棟造りを建つるに、烟け出しの広さ八畳敷、これに和布わかめ、ヒジキ、乾魚ひうおなどを貯え、凶歳に村民を救うた。その大厦たいかの天井裏で毎夜踊り廻る者あり。大工が天井張った時山茶の木の槌を忘れ遺のこせしが化けたという。

北欧の古雷神トールが巨鬼を平らぐるに用いた槌すなわち電は

擲なげうつごとに持ち主の手に還つた由で、人その形を模して守りとし、  
 また石斧をトールの槌として辟へきしや邪の功ありとした（マレの『北  
 方考古篇』五章。一九一一年板ブリンケンベルヒの『宗教民俗上  
 の雷器』八六頁已下）。アフリカのヨルバ人は雷神サンゴは堅い  
 アヤン木で棍棒を作り用ゆという（レオナードの『下ナイジャー  
 およびその民族』三〇三頁）。仏教の諸神大黒天、満善車王など  
 槌を持ったが少なからず（『仏教図彙』）。定家卿の『建仁元年  
 後鳥羽院熊野御幸記』に鹿瀬山を過ぎて暫く山中に休息小食す、  
 この所にて上下木枝を伐り、分に随つて槌を作り、榊さかきの枝に結い  
 付け、内ノハタノ王子に持参（ツチ分罰童子云々）し各これを結  
 い付く。これは罪人を槌で打ち罰した神らしい。『梅津長者物語』

にも大黒天が打出うちでの小槌で賊を打ち懲らす話がある。古エトルリアの地獄神チャルンは巨槌で亡魂どもを打ち苦しむ（デンニス著『エトルリアの都市および墓場』二卷二〇六頁）、『※余叢考』三五に鍾しようき馘しゆうきは終なま葵の訛つちりで、齊人つち椎を終葵と呼ぶ。古人椎を以て鬼を逐おうといえば、辟邪の力ある槌を鍾馘と崇めたのだ。その事毬杖として正月に槌まりで毬まりを打てば年中凶事なしというに類す

（『骨董集』上編下前）。『政事要略』七〇に、裸鬼が槌を以て病人に向うを氏神が追しりぞい却しりぞけた事あり。『今昔物語』二十の七に、染そめどの殿后を犯した姪鬼赤禪を著けて腰に槌を差したと記す。予が大英博物館に寄付してその宗教部に常展し居る飛天夜叉の古画にも槌を持った鬼がある。つまり昔は槌を神も鬼もしばしば使う靈

異なる道具としたのだ。劉宋の張稗の孫女、特色あるを富人求めたが、自分の古い家柄に恥じて与えず。富人怒つてその家に火を付け焼き殺した。稗の子、邦、旅より還つて富人の所為と知れどその財を貪つて咎めざるのみか、女を嫁しやった。一年後、邦、夢に稗あら見われ、汝不孝極まると言いて桃の枝で刺し殺す。邦、因つて血を嘔はいて死に、同日富人も稗を夢み病死した（『還冤記』）。桃はもと鬼が甚いたく怖おそるところだが、この張稗の鬼は桃を怖れず、桃枝もて人を殺す。ちようど悪徒は入れ墨さるるを懼おそるれど、追々は入墨を看板に使うて更に人を脅迫するようだ。そのごとく槌は初め鬼の怖るところだったが、後には鬼かえつて槌を以て人を打ち困らせたと見ゆ。『抱朴子』の至理の巻に、呉の賀將軍、

山賊を討つ、賊中、禁術きんじゆつの名人あつて、官軍の刀劍抜けず、  
 弓弩きゆうど皆還つて自ら射る。賀將軍考えたは、金に刃あり、更に毒  
 あるは禁ずべきも、刃も毒もなき物は禁術が利かぬと聞く。彼能  
 くわが兵刃を禁ずれど必ず刃なき物を禁じ能わぬべしと、すなわ  
 ち多く勁つよい木の白棒を作り、精卒五千を選んで先發せしめ、万を  
 以て計る多勢の賊を打ち殺したが、禁術は一向利かなんだとある。  
 『書紀』七や『豊後国風土記』には景行帝熊襲親征くまその時、五人の  
 土蜘蛛つちぐも拒み参らせた。すなわち群臣に海石榴つち（ツバキ）の椎を作  
 らせ、石窟を襲うてその党を誅し尽くした。爾後その椎を作つた  
 処を海石榴市つばいちというと記す。山茶つばきの木は粘き故当り烈しく、油を  
 搾る長杵ながきねにするに折れず。犬殺しの棒は先を少し太くし、必ず

この木を用ゆ。雕ちようこう工こうに聞くに山茶と枇杷びわの木の槌つちで身を打てば、内腫うちむを起し一生煩わづらう誠に毒木だと。こんな訳で山茶の槌つちを使うを忌み、また刀剣同様危あやぶみ怕おそれて、神や鬼の持ち物とし、さては山茶作りの槌つちや、床柱とこばしらは化けると言い出したのだ。山茶の朽木夜光くもくやこうる故山茶を化物という（『嬉遊笑覧』十下）のも、またこの木を怪しとする一理由だ。予幼時和歌山に山茶屋敷てふ土族邸あり、大きな山茶多く茂れるが夜分門を閉とづれど戸を締めず開け放はなしだった。然しかせぬと天狗の高笑たかわらいなど怪事多おほいと言いった。那智の観音本像は山茶の木で作るといふ。伊勢の一の宮都波木大明神は猿田彦まるとを祀まつる（『三国地誌』二三）、村田春海はるみの『椿詣つばきまでの記』に、その地山茶多しとあれば山茶を神としたものか。今井幸則氏



説に、常陸筑波郡今鹿島は、昔領主戰場に向うに先だちこの所に山茶一枝を挿し、鹿島神宮と見立て祈願すると勝利を得たからその地を明神として祀り今鹿島と号すと（『郷土研究』四卷一号五五頁）。鹿島には山茶を神木とするにや。『和泉国神明帳』には従五位下伯太椿社を出す。山茶の木を神として祀つたらしい。

祭礼の笠鉾などに鶏が太鼓に留まった像を出し諫鼓鳥と称す。『塵添 囊鈔』九に「カンコ苔深しなんと申すは何事ぞ、諫鼓をば諫めの鼓と読む。喩えば唐の堯帝政を正しくせんがために、悪しき政あればこの鼓を撃ちて諫め申せと定め置かれしなり。中略、何たる卑民の訴えも不達という事なかりしなり」、『連珠合璧』下、鼓とあれば諫め、苔深し。『鬻子』に禹の天下を治むるや五

声を以て聴く。門に鐘鼓鐸磬たくけいを懸け、以て四方の士を待つ。銘に曰く、寡人に教うるに事を以てする者は鐸を振え、云々。道を以てする者は鼓こを撃てと。『淵鑑類函』五二に「堯誹謗の木を設け、舜招諫の鼓を懸く」とあれど出処を示さず。熊楠色々と搜すと『呂覽』自知篇に「堯欲諫の鼓あり、舜誹謗の木あり」と出たが一番古い。余り善政行き届いて諫鼓の必用なく、苔深く蒸したと太平の状を述べたとまでは察するが、もつとも古くこの成語を何に載せたかを知らぬ。白居易作、敢諫鼓の賦あり。『包公寄案』には屈鼓とした。冤屈を訴うる義だ。『類聚名物考』二八五に土つ御門ちみかど大臣「君が代は諫めの鼓鳥狎なれて、風さへ枝を鳴らさざりけり」、三二〇に「今の世に禁庭八月の燈籠の作り物等に鼓上に

鶏あるを出す、諫鼓苔深くして鳥驚かずの意より出づと、云々、  
 此方こなたの上世は専ら唐制を移されたれば、恐らくは金鶏の作り物に  
 やあるべき」とありて、封演の『聞見記』を引き、唐朝大赦ある  
 時、闕下けっかに黄金の首ある鶏を高こう檀とうの下に立て、宮城門の左に鼓  
 を置き、囚徒至るを見てこれを打ち、赦のたまを宣えおわりて金鶏を除  
 く、この事魏晋いぜん已前聞えず、後魏または呂光より始まるという。  
 北齊赦あるごとに金鶏を閭門らもんに立てる事三日でやむ。万人競うて  
 金鶏柱下の土を少しく取り佩おぶれば、日々利ありというに数日間  
 ついに坑を成した。星占書に天鶏星動けば必ず赦ありと見えるか  
 らの事だと述べ、また万歳元年すうざん嵩山そうざんに封じた時、大榭樹杪せうせうに金  
 鶏を置いた由を記す。しかし支那に諫鼓また屈鼓が実在した証は

外国人の紀行に存す。例せば一六七六年マドリッド板、ナヴァレ  
 ツテの『支那帝国誌』一二頁にいわく、すべて支那の裁判所はそ  
 の高下に随つて大小の太鼓を備え、訟あるごとにこれを打つ、南<sup>ナ</sup>  
<sup>ンキン</sup>京の法庁にある者、殊に大きく象皮一枚を張り、大なる棒を高  
 く荒縄で釣<sup>つ</sup>るしてこれを打つと。レーノー仏訳、九世紀のアラビ  
 ア人、ソリマンの『支那記』四一頁にいわく、支那には市ごとに  
 知事の頭の上に鐘を釣<sup>る</sup>してダラー（銅鑼？）と名づく、それに  
 付けた緒<sup>お</sup>は街まで引つ張り置き、誰でもこれを引いて鳴らすを得、  
 その緒長きは一パラサンに達すとある。これはペルシャの尺度で  
 三英マイル半から四英マイル、時代に依つて変る。ちよつと緒に  
 触れば鐘が鳴り出すようにしあつて、不正の裁判を受けた者、こ

の緒を動かし鐘を知事の頭上で鳴らすと、知事躬みづからその冤訴を聴き公平の処分をする。かかる鐘を諸地方皆備えいると。レーノー注に、十二世紀のアラビア人エドリシの『世界探究記』に抛れば、昔北京ペキンの帝の宮殿近く太鼓の間あり。諸官兵士日夜これを警衛す、裁判不服の者と裁判を得ざる者、その太鼓を鳴らせば法官ちゆうち躊躇よせずその愁訴を聴き公平に判決す。この制今は行われずと。ユールの『カタイおよびその行路』巻一序論一〇六頁に、シヤムの先王この制を立てしもその役務の小姓ら尽力して廃止したとある。日本にも『書紀』二五、大化改新の際朝廷に鐘を懸はこけ、匱はこを設け、憂え諫むる人をして表を匱はこに納いれしめ、それでも聴き採られざる時は憂訴の人、鐘を撞つくべしと詔あり。その文を見ると、

『管子』に見えた禹建鼓けんこを朝に立て、訊望に備えたをなろ做うたらし  
 い。久米博士の『日本古代史』八四一頁に、この鐘しやうき匱は新令実  
 施が良民資産に直接の關係あるを以て、国司等の専断収賂あるを  
 慮おもんばかりこれを察知せんため一時権宜けんぎに設けられたるなり、古書の諫  
 鼓、誹謗木など形式的の物と看做みなすは大なる誤解なりとあれど、  
 古支那の諫鼓、擊鐘が冤を訴うるに实用あつたは、当時支那に遊  
 んで目撃した外人の留書とめがきで判る事上述のごとく、決して形式的  
 でなかつた。

## 概説

鶏、和名カケ、またクダカケ、これは百濟くだらかけ鶏の略でもと百濟より渡つた故の名か。かかる類たぐい高麗こまにしき錦、新羅しらぎおの斧など『万葉集』中いと多し（『北辺随筆』）、カケは催馬樂さいばらの酒殿の歌、にわとりはかけろと鳴きぬなりとあるカケロの略で（『円珠庵雜記』）、梵語でクツクタ（牝鶏はクツクチー）、マラガシーでコホ、新ジオールジア等でココロユ、ヨーク公島でカレケ、バンクス島でココク（コドリリングトンの『メラネシア語篇』四四頁、『ゼ・メラネシアンス』一八頁）等と均ひとしく、その鳴き声を名としたのだ。漢名けい鶏というも鶏は稽けいなり、能く時を稽かんがうる故名じよげづくくと徐鉉けんは説いたが、グリムムの童話集に、鶏声ケケリキとあったり、ニフィオレ島等で鶏をキオ、マランタ島等でクアと呼んだりする

から推<sup>お</sup>すと、やはりその声に因つて鶏（キー）と称えたのだ。ミソル島で鶏の名カケプ（ワリスの『巫来群島記』<sup>マレイ</sup>附録）、マラガシーでアコホ（一八九〇年板ドルーリーの『マダガスカル』三二二頁）など、わが国で鶏声をコケコというに通う。紀州東牟婁郡古座町辺で二十年ばかり前聞いた童謡に「コケロめんどり死ぬまで鳴くが、死んで鳴くのは法螺<sup>ほら</sup>の貝」。大蔵流本狂言『二人大名』に鬪鶏の真似する声、コウくくくコキヤコウくくくとある。これは鬪う時声常に異なり劇しい故コキをコキヤと変じたらしい。『犬子集』一四に「ととよかかよと朝夕にいう」「鶏や犬飼う事をのうにして」。只今は犬を呼ぶにかかといわぬが、鶏を呼ぶにトトくくというは寛永頃既にあつたのだ。チドレヤガレラで鶏を



トコ、アルチャゴおよびトボでトファイ（ワリス同前）、フアテ等でト、セサケ等でトア、エロマンガでツオ、ネンゴネでチテエと名づくるなど攷え合すと、本邦のトトは雄鶏の雌を呼ぶ声に由つたものらしい、魚をトトというは異源らしい。『骨董集』上編上を見よ。

『下学集』上、鶏一名司晨云々、日本にて木綿付鳥、あるいはいわく白辺鳥うすべどり、これは白の辺に付け纏まつわつて米を拾うからの名であろう。ユウツケ鳥は三説あり、『松屋筆記』七に鶏は申まをの時（午後四時）に夕を告げて埒ねぐらに籠るが故に、夕告鳥というにや云々。『敏行歌集』に「逢坂おうさかのゆふつけになく鳥の名は聞きとがめてぞ行き過ぎにける」、鳥も夕を告げて暮に向う頃なるに関せ

きもり

守は聞き咎めもせず関の戸も閉ざさざれば人も行き過ぎぬとな

り。集外三十六歌仙里見玄陳歌にも「遠<sup>おちかた</sup>方に夕告鳥の音すなり、

いざその方に宿り<sup>かた</sup>とらまし」とあつて、拙宅の鶏に午後四時に定<sup>き</sup>

まつて鳴くのがある。今一説はユウツケを木綿付と釈くので、仲<sup>な</sup>

かざね

実の『綺語抄』下にゆうつけ鳥、公の御禊<sup>おはら</sup>えに鶏にゆうを付け

て逢坂に放つなりとある。鶏をはたた鳥ともいう（『円珠庵雜記

』）は、虫にはたはたあるごとく、翼を叩いて出す音に因つたの

だ。『万葉』七に「にはつとりかけのたりをのみたれ尾の、長き

心も思はさるかも」。ニワツトリまたニワトリは庭に飼うからの

名だ。その他ヤコエノトリ、ネザメドリ、アケツゲドリ、ナガナ

キドリ、トコヨノトリと種々に異名ある（『重訂本草啓蒙』四四

)。「神代卷」や『古事記』に、天照大神岩戸籠りの時、  
やおよろず八百萬の神、とこよ常世の長鳴鳥ながなきどりを聚め互いに長鳴せしめたと見ゆ。  
 本居宣長曰く、常世の長鳴鳥とは鶏をいう。常世は常夜とこよで常世と  
 は別なり。言の同じきままに通じて、字にはこだわらず書けるは  
 古の常なり。ここに今かく常夜往時に集つどえて鳴かせし鳥たるを以  
 て後に負わせし称なるを、その始めへ廻らしてかくのごとくいえ  
 るなりと。『淵鑑類函』四二五、『広志』曰く、へ并州の献ずる  
 ところ、吳中長鳴鶏を送る、またへ九真郡長鳴鶏を出す。

『広益俗説弁』二五に『桂海虞衡志』いわく、へ長鳴鶏は高大  
 常鶏に過ぐ、鳴声甚だ長し、終日啼号絶えずとあるが、『礼記』  
 にへ宋廟を祭るの礼、鶏は翰音かんおんという、註にへ翰は長なり、

鶏肥ゆればすなわち鳴声長きなり」とありて、すべて他の諸鳥より鳴声長く続き、長く続くほど尊ばれたから、古本で鶏をすべて長鳴鳥というたのだ。『類函』に『風俗通』を引いて「鳴鶏朱々と曰う、俗にいう、相伝う鶏はもと朱氏の翁化してこれと為ると」、注に「讀むこと祝々のごときは、禽畜を誘致して和順の意」。これは日本で鶏を呼ぶにトトくと唱うるごとく、漢時代には朱々と唱えて呼ぶに因つて、朱氏翁が鶏になつたとこじ付けたのだ。これから鶏の東西諸邦の名を述べると、古英語で雄鶏をハナ、雌鶏をヘーンといったは、あたかも独語のハーンとヘンネ、蘭語のハーンとヘン、スウェーデン語のハネとヘンネに当る。ヘーンはヘンとなつて残つたが、ハナは全く忘却され、現時英語で雄鶏

をコック、鷄雛をチツケン、中世ラテンで雄鷄をコックス、仏語でコク、いずれもクツクまたキツクなる語基より出で、つまりその鳴き声に因った由（『大英百科全書』十一板十三卷二六五頁）。『続開卷一笑』四に、吃<sup>ども</sup>りに鷄の声を出さしむべく賭<sup>かけ</sup>して穀一把を見せ、これは何ぞと問うと、穀々と答えたとあれば支那も英仏同前だ。英名ファウルは独語フォーゲル、デンマーク語フューグルと等しくもと鳥の義だったが、今はシー・ファウル、ウオーターファウル（海鳥、水鳥）等の複名のほか、単にファウルといえば雌雄鷄を兼称する事となりいる（『大英百科全書』十卷七六〇頁）。わが邦でトリは鳥の総名だが、普通の家庭では鷄を指すに等し。ただし正確に鷄を指すにはコンモン・ファウル（尋常鳥）、

またダングヒル・ファウル（掃溜鳥<sup>はきだめ</sup>）というて近属のピー・ファウル（孔雀）、ギニー・ファウル（ホロホロ鳥）等と別つ。仏語で雌雄鶏を併称してプール、雛はプーレ、これより出た英名パシルトリーは肉食採卵のため飼つた鳥類の総称で鶏、七面鳥、鵝<sup>が</sup>、家鴨<sup>あひる</sup>、皆その内だ（同二二卷二一三頁）、伊語で雄鶏をガロ、雌鶏をガリナ、西語で雄ガヨ、雌ガイナ、露語で雄ペツーフ、雌クリツアなど欧州では雌雄別名が多い。東洋や南洋となると、マレイで雄鶏アヤム・ジャンタン、雌鶏アヤム・ベチナ、サモアで雄鶏モア・タンガタ、雌鶏モア・ファファイネなどはわがオンドリ、メンドリに似居るが、オニワトリ、メニワトリといわぬを見ると、英語のファウルと等しく、昔は鶏を本邦で単にトリといったもの

か。鳥の音ねといえは専ら鶏声を指し居る。鶏の名へブリウでウー  
フ、ヒンズスタンでムルギ、タシルでケリ、ジャワでピテク、モ  
レラ等でマヌ、カジエリでテフイなど何に基づいたのか予に分ら  
ぬ。

英語に鶏から出た詞ことばが多い。例せば雄鶏が勝気充溢して鬩いに  
掛かるごとく、十分に確信するをコツク・シユア、妻に口入れさ  
れて閉口するを、雌鶏に制せらるる雄鶏に比べてヘンペックト。  
それからコケツトリ、これは昔は男女ともに言つたが、今は専  
ら女のめかし歩くを指し、もと雄鶏が雌鶏にほれられたさに威張  
つて闊歩かつぽするに基づく。コケツトといえは以前は女たらしの男を  
も呼んだが今は専ら男たらしの女を指す。それからコツクス・コ

ーム（鶏冠）はきぎにしやれる奴のべつしよう蔑称で雄鶏が冠を聳そばだてて  
 威張り歩くに象かたどつたものだ。また力み返つて歩むを指す動詞にも  
 雄鶏の名そのままコツクというのがあつた。往年予西インド諸島で  
 集めた介かいがら殻を調べくれたリンネ学会員ウイルフレッド・マーク  
 ・ウエツブ氏の『衣装の伝統』（一九一二年板）に、洒落者しやれものを  
 コツクス・コームと呼んだ訳を述べある。シャパロンてふ頭巾ずきんは  
 十四世紀に始めて英国で用いられ、貴族男子や武士が冒かぶつたが、  
 十六世紀よりは中年の貴婦人が専ら用いた。だから英仏語ともに  
 未通女おとめの後見として、群聚や公会に趣く老婦をシャパロンと呼ぶ。  
 『ニュー・イングリシユ・ジクシヨナリー』に拠ると、近年英国  
 では若い女の後見に添そいで行く紳士をもこの名で呼ぶ。第二図イに



示す通り、以前頭巾の頂後を短く突出したが、追々それが口のごとく長い尾となつて垂れ下りついに地に触るるに及んだ。その尾の縁に鰭ひれを附けて誇る事となつたが、更に支那人の喧嘩に豚尾を巻き固めたごとく、鰭を畳み頭の一侧に立たせて長尾で頭巾に巻き付ける風になり（ハ）、後には手数くだんを省くため二のような出来合あいのシャパロンが出来た。件の鰭を頭巾に巻き付けた体ていが馬鹿に鶏冠けい冠に似ているので、洒落しやれた風をする男をコックス・コームと称えたそうだ。

## 第2図 シャパロンの進化

## 第3図 英国のコツケイド二種

このシヤパロンから出ただろうといわれるコツケイドという物がある。この名もコツク（雄鶏）から出たらしく（『大英百科全書』十一板六卷六二二頁）、第三図イの通り鶏冠によく似たから付けた名と見ゆ。これは帽の一方の縁を高く反り立たしめる事、昔流行し帽の頂から緒でその縁を引つ張るため縁に穴あり、緒の端に付けたボタンを通して留めた、そのボタンと穴の周囲の環から化け出たというが通説だ（ウエツブ氏の書四四頁）。『大英百科全書』に、英仏その他で政党や軍士が古く形色各別のコツケイドを佩びた事、並びに欧州諸邦の王家それぞれコツケイドの色を異にした例を多く挙げいる。二十九年前の秋、予始めて渡英し王



宮辺を徘徊すると、貴族の馬車絡らくえき繹えきたるその御者が、皆本邦神社の門側に立つやだいじん箭大臣やだいじん（『旧事紀』にとよいわまど豊磐間とよいわまどの命みこと、くしいわまど櫛磐間くしいわまどの命みこと）の命みこと二神をして殿門を守らしむとあり、今の箭大臣はこの二神なるべしと『広益俗説弁』にあれど、『旧事紀』は正書でないから虚説で、その実仏寺の二王門を守るに倣いて作ったのだ）や、百人一首でおき稚なしみななりひら馴染なりひらの業なりひら平の冠なべとりに著けた鍋取なべとりによく似た物を黒革作りで高帽の一側に著けあり。中には金魚がらくがん落雁らくがんを食つたよことねりうな美少年も多く、南方先生「大内のことねり小舎人ことねりててにや〜」てふ古謡をおも臆おそい起し、なら寧楽なら・平安古宮廷の盛時を眼前に見る心地して、水ばなどともに散り掛かるプラタヌスの下に空腹ながら時ならぬ春を催しやした。かくてあるべきにあらざれば下宿へ還つ



て『用捨箱』を緋くと「鍋取公家というは卑しめていうにはあ  
 らず、老懸を掛けたるをいえるなり、老懸を俗に鍋取また釜  
 取ともいう」とある。釜取という名からまた先刻見た美少年ど  
 もを想い出したのも可笑しい。「さて今厨にて鍋取を用うる家た  
 またまあれども草鞋足半の形に作れり、古製は然らず。小さき  
 扇の形したるが、かの老懸に似たる故に然いしなり。左に模し  
 し画にてその製り様を見たもうべし（第四図イ）、『鹿苑院殿  
 のごげんぶくき』御元服記』永和元年三月の条、〈御車新造、東寺より御輿、御  
 力者十三人、牛飼五人、雑色九人、車副釜取以下〉とある  
 は、老懸を付けし者の供奉の事を記ししにて釜取といひしは最古  
 し。また『太平記抄』慶長十五年作二十四卷、卷縷の老懸の註

に、老懸とは下々しもしもの者の鍋取というような物ぞと見え、寛永十年の或記に浅黄あさぎの指貫さしぬき、鍋取を冠り、弓を持ち矢を負うとあり。貞室の『かたこと直し』慶安三年印本に綏おいかけを鍋とりという事いかがと制したれど、その師貞徳ていとくの句にも見え近くは『仮名字例』（延宝四年印本）に「おいかけ、綏、冠具。俗ナベトリというとあり、今は老懸を知らざる者なく、厨の鍋受は見ざる人多かるべし」、『油かす』寛永二十年編云々「公家くげと武家とはふたかしらなり」「なべとりをかぶとの脇に飾りつけ」前句に一一ふたかしら頭とあれば、かぶり物を二つ取り合せ、武家胃、老懸公家と附けたるなり。『俳諧二番鶏』元禄十五年印本了我撰、前「下妻と八重に打ち合ふ春の風、一林」付「一枚さしたる櫛は鍋取、了我」、

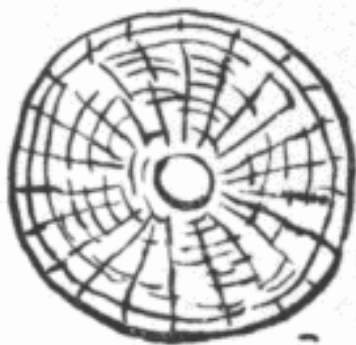
柳翁いわくこれも櫛を老懸に見立てし句なり。『空林風葉』天和三年刻自悦撰、節分「鍋取飛んでほうろく豆踊る今宵こよいの天、流辺」、上に録したる句は老懸をいいしにはあらず。この（すなわち第四凶イ）鍋取の形を蝶鳥の翼に見立てし吟なり」とあつた。

#### 第4凶

『和名類聚鈔』に、わみやうるいじゆしやうへ綏、和名冠ノ才、老人髻落つるを綏を以て繋ぐとあり。『康熙字典』を見ると、冠の緒をも緒を係る飾りをも綏すいといつたらしく、その飾りは蟬せみの形や旄ぼうぎゆう牛の尾を立てたらしい。されば上出『仮名字例』等に綏を老懸あに充てたは当りいる、これをオイカケというは緒を懸ける義で、老懸は当



鍋取の古形



三丁の宅に  
用ひ居了  
鍋取

て字、それを強解するとして、髻落ちた老人は、綾で繋ぎ留めるな  
 どいうたのであろう。鎌倉時代につちみかどみちかたきよう土御門通方卿が筆した『かざり飴  
 抄』に、老懸古今厚薄異なるなり、古は外薄きなり、今は甚だ厚  
 し云々と見ゆれば、仕立てに色々流行が異なつたのだ。わが邦で  
 弓矢を帯ぶる輩これを著けたは、昔英国で「コツケイドを立てる」  
 とは兵士になつたてふ意味だつたと偶合する。鍋取また釜取は鍋  
 釜の下に敷く物で、その古い形が老懸に似たので老懸を鍋取と俗  
 称したは、『用捨箱』の説通りだ。さて老懸を櫛に、鍋取の形を  
 蝶鳥の翼に見立てたのも、英国のコツケイド（第三図イ）の上に  
 拡がり立てたファン（扇）と呼ばれる部分が、翼にも、櫛にも似  
 ているに似ている。『用捨箱』の書かれた頃は、草鞋形の鍋取がた

またま用いられたそうだが、現に拙宅に伝え用いいる物は正円で、第三図口に示す英国のコツケイドに似ている。かように似ているだらけによく似ているが、わが邦の老懸は支那の綉から転化して冠とともにわが邦で発達したので、もと冠の緒を掛けるための設備、欧州のコツケイドは、老懸が冠の両傍に備わると違い、帽の一方のみに立てられ、その原型らしい物が、わずかに十五世紀にラブレールの書に初めて見え、まさか日本に模したのではあるまじければ、日本国より欧州に倣うたでもない。老懸も鍋取も、帽の一方の縁を起すために穿った穴と、それを通して帽頂に繋ぎ留めた緒の端のボタンとより出来上ったコツケイドとは全く同形異源だ。世間事物の外形は千変万化も大抵限りあれば、酷似せるもの

が箇々別源から出来上るも不思議ならず。その源由を察せず、似た物は必ず同根同趣と判断するは大間違いじや。孟子とルツツ、大塩とクロムウエルを同視したり、甚だしきは、米国学者が、貝原益軒は共和政治を主張したと言つたとて感心している人もある故、一言し置く。

『日本紀』に日本武尊東夷を平らげて碓うすひさか日坂に到り、前日自身に代つて水死した弟おとたちばなひめ橘媛あづまを追懐して東南を望み、吾孀はや、

と三たび嘆じた。それから東国をアズマと呼ぶとある。鳥が鳴くアズマのアズマだけ分つて、鳥が分らぬ。宮崎道三郎博士かつて

『東洋学芸雑誌』に書かれたは、朝鮮語であさ晨をアチム、例推するに本邦で上世、晨すなわち日の出る事をアズマと呼び、東は日の

出る方故、東国を朝早く鳴く鶏に併あわせて鳥が鳴く吾妻と称えただ  
 ろうと、洵まことに正説で、ドイツでも朝も東も通じてモルゲンと名づ  
 くる。前述の通り、『淮南子』に「鶏まさに旦あしたならんを知り、鶴  
 夜半を知る」とあり、呉の陸璣は、鶴は鶏鳴く時また鳴くといっ  
 た。鳥が朝暮に定まつて鳴くは周知された事、したがって伊勢・  
 熱田等に鶏を神物とすると同時に、熊野を始め鳥を神使とした社  
 が多い。古エジプトには狗頭猴が旦暮さわに噪ぎ叫ぶよりこれを日神  
 の象徴とした。予は不案内だが、親友小鳥好きの人の話に、駒鳥  
 は夜の九時になると必ずチーンと一声鳴き、爾後静まり返つて朝  
 まで音もせぬ由。当否は論ぜず、この事あるに由つて古人が支那  
 書の知更雀を駒鳥と訓よませたと見える。東牟婁郡第一の高山、大

塔の峰で年久しく働く人々に聞いたは、かの山難所で時計など持ち行く者なく、鶏飼うべき所もないが、ちようど一番鶏の鳴く頃ゴキトウゴキトウと鳴く鳥あり。暁に近づくとニエニエと鳴く鳥あり。昨夜はゴキトウの鳴くまで飲んだとか、ニエの声で起きたとか、あらまし時計代りに語り用ゆと。時計の運搬のならぬ処までも酒は行き渡り居るらしい。支那の三十六禽に雉と鳥を鶏に属したは、鶏、鳥と齊ひとしく雉も朝夕を報ずるものにや。『開元天寶遺事』に商山の隱士高太素、一時ごとに一猿ありて庭前に詣いたり鞠きつつきゆうゆう躬こうして啼なく、目なづけて報時猿と為なすと、時計の役を欠かさず勤めた重宝な猿松だ。『洞冥記』に影娥池の北に鳴琴の院あり、伺夜鶏あり、鼓節に随つて鳴く、夜より暁に至る、一更ごとに一声

を為<sup>な</sup>し、五更に五声を為す、また五時鶏というとある。時計同様に正しく鳴く鶏だ。『輟耕録』二四にかつて松江鍾山の浄行菴に至つて、一の雄鶏を籠にして殿の東<sup>とう</sup>簷<sup>えん</sup>に置くを見てその故を請い問う。寺僧いわく、これを畜<sup>こ</sup>うて以て晨<sup>しん</sup>を司<sup>つかさど</sup>らしむ。けだし十余年なり、時刻<sup>たか</sup>爽<sup>さわ</sup>わずと、余窃<sup>ひそ</sup>かに記す。張公文潜の『明道雑誌』にいわく、鶏<sup>よ</sup>能<sup>よ</sup>く晨<sup>よ</sup>を司る事<sup>あ</sup>経<sup>ら</sup>伝<sup>ん</sup>に見<sup>あ</sup>わ<sup>ら</sup>れて以て至論と為す、しかれどもいまだ必ずしも然らざるなり。あるいは天寒く鶏<sup>ものう</sup>懶<sup>れん</sup>ければまさに且<sup>かつ</sup>ならんとするに至つていまだ鳴かず。あるいは夜月出る時、隣鶏ことごとく鳴く、大抵有情の物自ずから常ある能わずしてあるいは変ずるなり。もししからばすなわち張公が言非なるか、因つて拳似して以てその所以<sup>ゆえん</sup>を詢<sup>と</sup>う、僧<sup>そう</sup>いう晨<sup>ちん</sup>を司る鶏は必

ず童を以てす。もし天真を壞らば豈能く常あらんや、けだし張公特にいまだこの理を知らざる故のみと記す。雄鶏を雌と隔離して一生交合せしめなんたら果して正しく時を報ずるものにや。暇多い人の実験を俟つ。『世説新語補』四に賀太傅吳郡の太守と為りて初め門を出でず、吳中の諸強族これを軽んじ、すなわち府門に題していわく、会稽の鶏は啼く能わずと。賀聞きてことさらに出で行き、門に至りて回顧し、筆を求めてこれを足して曰く、啼くべからず、啼かばすなわち呉児を殺さんと。ここにおいて諸屯邸に至り、諸強族が官兵を役使しました逋亡を蔵せるを檢校し、ことごとく事を以て言上し、罪さるる者甚だ多し、陸杭時に江陵の都督たり、ことさらに孫皓に下請し、しかる後釈くを得たりとあ



る。昔細川幽齋、丹後の白杉という所へ鷹狩に出た時、何者か道の傍かたわらの田くろの畔に竹枝を立て書いた物を掛け置いた。見れば百姓の所為らしい落書だった。その文句に「一おしおきめいわくつかまつ仕るはにがにがしき御仕置にて、さんざんしほうげごんご道断なり。六月の日てりには七貧乏をかかげはちをひかくふせい、くにに堪忍なるように十分にこれなくとも仰せ付けられ下さるべく候」と書き付けてあり、幽齋大いに笑い、閑雪という側坊主を召してその紙の奥に書かせたは、「十分の世の中にくかたせ事を申す百姓かな、八幡聞かまじきとは思えども、七生よりこの方かた六になきは地下じげの習い、ごくもんに懸るかしばりて腹をいんと思えども、さんりんゆるに隠れぬれば、にくき仕方を引き替えて一国一命免ゆるすものなり」と。かく

書かせて元の所へ置かせられた（改定史籍集覽本『丹州三家物語』七三頁）、三国鼎争ていそうの最中や戦国わずかに一統された際の人間は、百姓までも荒々しいと同時に気骨あり、こんな落書をしたので、それを直様すくさま自ら返辞した大守もえらい。昨今の大臣や地方官も何卒なにとぞせめて、この半分も稜かどありて、自ら国民の非難を反駁し、理由さえ正しくば遠慮なしに打ち懲らされたい事じゃ。件くだんの賀太守を会稽の鶏に比べたは、その頃会稽に鳴かぬ鶏が有名であつたらしい。予サンフランスコへ着いて下宿の傍に鶏を多く畜う家の鶏が、毎夜規律なく啼き通すに呆あきれたが、その後のちスペイン人オヴィエドの『西印度誌』六を繙ひもとくと似た事を記しあつた。いわく、スペインおよび欧州の多くの部分では鶏が夜央よなかと日出に鳴

き、ある鶏は一夜に三度、すなわち二時また三時と真夜中と曙光が見える四分の一時前とに鳴く。しかるに西インド辺では日没後一時、また二時して鳴き夜明け前一、二時また鳴くが夜中に鳴かぬ、ある鶏は夜の初しよこう更に鳴くきりでその他一度も鳴かぬ。故に一夜に二回また一回鳴き、夜中には鳴く事なし、さて、西インドの最も多くの鶏は日出の一時半か二時前に唱うと。それから北アフリカや西伊仏国の猫は二月初半に喚き歩いて妻を呼ぶが、西インドへ輸入するとたちまち風変わりとなって鳴きさわ噪がず、その代りにいつ盛るといふ定めもなく年中唾でやり通しで、林中に食物多き故、野生となつて大いに蕃はんしよく殖す。鶏が時を違え猫がやり通しにし散らすも氣候の影響だろうと論じ居る。自分不案内の事な

がら自分や知人どもが知り得た所に抛ると、どうも日本の鶏が雑種多くなるに伴つれて鳴く時が一定せぬようになったと惟おもう。その理由を研究して多少明らかめ得た所があれば、今は述べず、読者諸君にも研究を勧め置く。南米のある地方へ鶏を移した時、どうも蕃殖せなんだが、この頃は蕃殖すると聞く。そのごとく外国種の鶏も追々土著しおわるに従つて鳴く時も一定するはずかとも考える。

時計のない世に鶏を殊に尊んだは、諸社にこれを放ち飼いにし、あるいは神鳥としてその肉を食わなんだで知れる。インドでも鶏肉を忌むが、多く堂の側に半野生として放置したらしい（一八九五年ケンブリッヅ板、カウエルの『仏本生譚』二卷二八〇頁）、  
仏寺にも勤ごんぎよう行修学の時を規すため、鶏を飼うを忌まなんだは、

北院御室の『右記』に、寺の兒童小鳥飼う事はたいしつ大失なくとも一切停止す、鶏と犬は免ず、内外典中その徳を多く説けり。鶏に五徳あり、あるいはその家の吉凶を告ぐ、また真言宗に白鶏尾を秘壇の中瓶に立つる事あり、殊に時刻を告ぐる事大事大切なりとあるので分る。鶏の五徳とは、『韓詩外伝』に、頭に冠を戴くは文なり。足に距けづめを持つは武なり。敵前に敢あえて闘うは勇なり。食を見て相呼ぶは仁なり。夜を守つて時を失わぬは信なりと出づ。これについて可笑おかしきは、彬師という僧客と対するに猫が一疋その傍かたわらに離れざるを彬客に語つた言葉で、人は鶏に五徳ありというがこの猫にも五徳あり。鼠を見るも捕えず仁なり。鼠に食を奪わるるも怒らずに譲り与うるは義なり。客至つて饌せんを設くればすなわ

ち出で来るは礼なり。物を蔵するに密なれども能く盗むは智なり。冬月毎つねに竈かまどに入るは信なりと。客聞きて絶倒すと『淵鑑類函』猫の条に出づ。それについてまた可笑しきはボカチオの『イル・デカメロン』に、僧が主人に対してアリストテレスは賢人の七徳とかを述べたが、わが従僕また七徳ありとてその過失を指折り数え立てるところがある。英国の弁護士で『デカメロン』の諸話の起因と類譚を著わしたエー・コリングウッド・リー氏が出しゅっぱん板前に書を飛ばして、予が知つただけの事を洩もらしくれ編入したいからと言うて来たので、多少書き送つた内に、この譚の類話として鶏と猫の五徳を書き送つたが、従僕の七徳として実はその七徳を嘲あざけつた譚は読んだ事なしというて来た。一生をこの一書に厮殺しきつし

たりー氏ですらこの書の内にある事を知り及ばない。だから馬琴の口吻こうぶんで書を読む事誠に難くもあるかなだ。而してしかいわんやまたザラに世上に跋扈ばっこする道で聞き塗みちに説く輩においてをやだ。それから人は冗談は言わぬもので、往年予、土宜法竜師に分らぬ事あればチト何でも聴きにこいと云つたのを忘れぬと見え、四年前に仁和寺御室から叮嚀な封状が届いたのでギョツとしたが、相手が出家ゆえ金の催促でもあるまいと妻子の手前徐おもむろに開封すると、茶の十徳という事あり、何々を指すか名目を聞かせくだされたいとの文言に大いに周章し、種々血眼ちまなこで探つたが見えず、『沙石集』等に茶の徳を数えた所はあれど十の数に足らず、何か世間のない書物の名を拵こしらえて啞うそでも書いてやろうかと思うたが、いずれ

先方も十分支度して掛かったはずと惟えばそうもならず。親の仇同前に心掛けて配慮する内、やっと近頃西鶴の『日本永代蔵』につぼんえいたいぐら卷四の四章に「茶の十徳も一度に皆」てふ題目を立てたを見出した。その話は敦賀港の町外れで、はず荷い茶屋を営業する小橋の利助といえる者、朝茶を売りにて大問屋となり、出精するうち悪心起り、越中、越後に若い者を派遣し、人々の呑み棄てる茶殻を京の染屋に入れるとて買い集め、それを飲み茶にまじ雑えて人知れず売り、大利を得たが、天の咎とがめを免れず、乱心して自分の奸曲を国中に触れ廻り、死後その屍を天火に焼かれ、跡は化物屋敷になったという事で、譚中に茶の十徳の事は一つも見えぬ。惟うに茶人の著きる十徳という物あるに因つて、茶を植うれば他の作物に十倍増して



利益ある由を、この書の出来た貞享五年頃、またはその前に世に  
 言い囃しはや、当時諺となつて人口に膾炙かいしやしたものであるまいか。  
 故にこの茶の十徳というは鶏や猫の五徳と事異なり、十倍の利得  
 るといつたまでの事で、この徳あの徳と一々名目を列ねたもので  
 なかろうと土宜師へ答え置いたが、どうも自分ながら胡麻ごまの匂い  
 がする。識者の高教を仰ぐ。

右に引いた『韓詩外伝』の文で分る通り、鶏の五徳は雄鶏に限  
 った事で、牝鶏に至つては古来支那で面白からぬ噂あり。牝鶏の  
 晨しんするを女が威強くなる兆きざしとして太く忌んだが、近頃かの邦くにの女  
 権なかなか盛んな様子故、牝鶏が時作つても怪しまれぬだろう。  
 英国でも女に制せらるる骨なし男をヘン・ベックト、牝鶏に啄つづか

るるといふ。グベルナチスいわく、イタリア、ドイツおよびロシアに広く信ぜらるるは牝鶏が牡鶏同然に鳴く時は大凶兆たり。これを聞いた者自分の死を欲せずんば即座にこれを殺すべしと。ペルシャでは牡鶏よく悪鬼を殺すとて墓所にこれを放ち飼いにす。ただし牝鶏の晨するを忌む。論士サツダーこれを駁して牝鶏の晨するものは牡鶏同様魔を殺すの功あろうから殺すべからずと言つた。シシリーではかかる牝鶏は売りも餽<sup>おく</sup>りもせず、主婦が食うべしという由。熊楠案ずるにスエーデンで同心結（コンヌビアル・ノット）を結ぶ内、新婦が婿より前に進みまたわざとらしからぬように手巾を落すと婿が拾つてくれる。かくすると一生嬪且那で暮し得と信ず（ロイドの『瑞典小農生活』八六頁）。それと同流

の心得で、晨する牝鶏を食えば主婦が亭主を尻に敷き続け得と信じたのだ。本邦にも牝鶏の晨するを不吉とした。『碧山日録』に、長祿三年六月二十三日みずのとう癸卯、天下飛語あり、諸州の兵窃ひそかに城中たむろに屯す、けだし諸公預め禍の及ぶを懼るるなり。あるいは曰く、北野天満神の廟の牝鶏晨を報ずるなり。神巫みここれを朝ちように告ぐというに見ゆ。この時女謁盛んで將軍家ばかりか大諸侯の家また女より大事起らんとしたからこんな評判も立ったのだ。大正八年三月の『飛驒史壇』、故三嶋正英の『伊豆七島風土細覽』に新にいじ島の乱塔場まに新しく鶏を放ち飼った土俗を載せある。これは卵を食用にするためのよう読まるるが、あるいはもと右述ペルシア同前悪魔除よけにしたのかとも考う。『松屋筆記』五に浅草観音に

鶏を納むるに日を経れば雌鶏必ず雄に変ず、仏力にてかくのごとしとあるが、靈境で交合したり雛を生み、ピーピー走り廻られては迷惑故、坊主が私ひそかに取り替えたであろう。それについて思ひ出すは李卓吾の『開卷一笑』続二に、陳全遊は金陵の妓なり、詞章に高く多く題詠あり云々、一日隣奴何瓊仙なる者と同飲す、たまたま雄雌鶏相交わるを見、仙請うてこれを詠ぜしむ、その詞に曰くへ汝靈禽にして走獸にあらず、風流の事誰かあらざらん、ただ好く背地に情を偷む、なんぞ当場の呈醜を許さん、かくのごときは律に罪を問うを休やめよ、まさにみな笞杖徒流すべし、更に一等を加えて強論せば、殺し来りて我がために下酒とせんゝとは、さすがに詩の本場だけあつてよく詠んだ。『五雜俎』に、景物悲

歎何の常かこれあらん、ただ人のこれに処する如何というのみ、  
 詩に曰く風雨晦くらし、鷄鳴いてやまずと、もとこれ極めて凄涼せいりょう  
 の物事なるを、一たび点破を經れば、すなわち佳境なと作ると。さ  
 ればゲーテはいかな詰まらぬ事をも十分に文想を振うて至極面白  
 く詠んだとシヨツペンハウエルは讚めたと記憶する。

『常山紀談』に、池田輝政、武士の重宝とすべきは領分の百姓と  
 譜代の士と鷄と三品なり。それを如何と言うに、百姓は田畑を作り  
 て我上下の諸卒を養う、これ一の重宝なり。譜代の士たとえ氣に  
 応ぜずして扶持を放すといえども、敵国にてかの者を扶持放たる  
 と思わずして間かんにも入るかと思うて疑う故、敵国に逗留する事  
 能わずしてついには我国へ帰りわが兵となる故これ二の宝なり。

また目に見ゆる合図、耳に聞ゆる相図は敵の耳目に掛かる故容易たやすく敵国にて成しがたし、鶏鳴は誰もその相図ぞと知らざる故に、すなわち敵国の鶏鳴にて一番鳥にて人衆を起し、二番鳥にて食い、三番鳥にて立つなどと相図を極めて敵もその相図を知らざるの徳あり、これを三の重宝と立てしなりとのたも宣うと見え、吉田久左衛門陣中に鶏を飼いしを、時を知るべき心掛け奇特なりとて、家康が感じた由『備前老人物語』に見える。時計始めて渡来した時これを鶏の時を報ずるに比べて明みんじん人が時鶏と書いたは、北斗の形した針が時を指し自ずから鳴いて人に知らず事鶏のごとくなる故と白石先生の『東雅』に出づ。慶安元年版『千句独吟之俳諧』には「枕上の時鶏に夢を醒さまされて」「南蛮人の月を見るさま」と時鶏

の字を用い居る。

古アテネで娼妓を牝鶏と綽名あだなした。これは婉えん転てん反側して男客を俟まつの状に象かたどり、またカワセミと称えたは路傍に待ちいて客人を捉とうるの手速きに抛なつたのだ。それから昔尖塔の頂上に板を雄鶏に造つて立て、僧徒にこの板が風に随まうて動きやまぬごとく少しも懈おこたらぬよう訓おしえたとジユカンシユは言つたが、グラマー説には、塔頂に十字架に添えて鶏の形を設くるは、ゴット人が雄鶏の武勇にあやかるためこれを軍旗とした遺風という。今は塔上に限らず、民家の屋根にも風見の鉄板を立てるを、鶏の形をせざるなお天気鶏（ウエザー・コック）と呼ぶは右の訳である（ハズリツト、二卷六二六頁、ウェブストルの大字書）、欧州で昔カワセ

ミの嘴くちばしを括つて全身を掛け置くと、その屍が風の方角を示すと信ぜられ、英国のサー・トマス・ブラウンが実験したところ一向不実と知れた（ブ氏の『俗説弁惑』三卷九章）。

野生の鶏種々あるがまずは四種とする。英語で総称してジャングル・ファウル（藪鶏）と呼ぶ。第一赤藪鶏は疑いなく一切家鶏の原種で、前インドより後インドの森林と竹藪に棲み、ファイリツピン島近きチモン島にもあり。形色すこぶるシヨウコクに類し、畑を刈った跡へ十羽から二十羽まで群を成して荒しに来る。鳴く声バンタムに似たれど長く引かず、正月より七月の間に乾草や落葉を掻き集めた上に八より十二卵を生むという。熊楠案ずるに、『和漢三才図会』に家鶏日々一卵ずつ生むをその都度取り去れば



幾つともなく生み続けて数定まらず、もし取らずに置けば十二卵を生んでやむとあるによりどころ拠あるごとし。次は灰色藪鶏、インドにのみあり、頸毛の茎膨大して角板となり、その尖端黄臘を点ぜるごとし。その声異様にて形容しがたし。藪中で家鶏と交わり卵を生めど、その雛長じても子を産まず。赤藪鶏と近く棲む所では間種を生ずれど、それもまた種を続けず。第三にセイロン特産のシンガリース藪鶏、また家鶏に似るが、胸赤く、冠黄で、縁赤く、頬あごの垂すい囊のうが紫赤し。その声清けれどきれぎれに「ジョージ・ジョイス」と呼ぶごとし。家鶏と雑種を生じやすいが種続かず。山の低い部分に住む。第四はジャワ等諸島に住むガルス・ヴァリウス、全く頷毛なく冠大にして切り込みなく、頷垂れただ一なる

のみ、羽色多く緑で家鶏との間種は稀に種を伝う。

(大正十年十二月、『太陽』二七ノ一四)

# 青空文庫情報

底本：「十二支考（下）」〔全2冊〕 岩波文庫、岩波書店

1994（平成6）年1月17日第1刷発行

1997（平成9）年10月6日第10刷発行

底本の親本：「南方熊楠全集第二巻」〔十二支考※〕〔#ローマ数字2、1-13-22〕 乾元社

1951（昭和26）年11月25日発行

初出…1「太陽 二七ノ一」博文館

1921（大正10）年1月

2「太陽 二七ノ二」博文館

1921（大正10）年2月

3 「太陽 二七ノ三」博文館

1921（大正10）年3月

4 「太陽 二七ノ五」博文館

1921（大正10）年5月

5 「太陽 二七ノ一四」博文館

1921（大正10）年12月

※◇内の引用漢文の訓読は、編集部によります。

入力：小林繁雄

校正：門田裕志、仙酔ゑびす

2009年5月4日作成

2016年5月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 十二支考

## 鶏に関する伝説

2020年 7月13日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫  
著者 南方熊楠  
URL <http://www.aozora.gr.jp/>  
E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)  
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU  
URL <http://aozora.xisang.top/>  
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks  
青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>